

平戸藩主が築いた黄泉の国としての菩提寺について

永松義博*, 杉本和宏, 吉田 健, 山下真輝

南九州大学 環境園芸学部 環境園芸学科

2015年10月1日受付; 2016年2月1日受理

The Family Temple Built as the Other World by the Lord of Hirado Domain

Yoshihiro Nagamatsu *, Kazuhiro Sugimoto, Takeshi Yoshida, Masaki Yamashita

Faculty of Environmental Horticulture, Minami-Kyushu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 1, 2015; Accepted February 1, 2016

Hiromu Matsura, the tenth lord of the Hirado domain, was born as the third son of Seizan Matsura in the third year of Kansei (1791) in Hirado Castle. While holding his post as lord, he was aggressive in promoting new industries, such as the development of clam culture and new rice fields to overcome the financial difficulties. He also had a profound knowledge of culture and was accomplished in *Chanoyu* (tea ceremony) and *Kodo* (traditional incense-smelling ceremony). Hiromu left a wide range of achievements, including the *Hyakkano-zu* (a confectionary record) and the *Hiradoryo Jikata Hachikisho-zu* (a collection of scenic landscapes in Hirado territory). He was the only lord of the Hirado domain who continued in Hirado, from his retirement at age 50 in the twelfth year of Tempou (1841) until his death in the second year of Keio (1867), at age 76.

This study discussed the *Enyuzan-Ryuzuiji* (currently: *Zenzanfumon-ji*), which Hiromu constructed as the family temple and analyzes his *Kigatsuhaijunki* and the historical materials transmitted to the Matsura domain. A field survey was also conducted to investigate the particulars of *Garannhaichi* and other structures. Details of the construction of the family temple have been clarified.

Key words: *Chanoyu* and *Kodo*, Family temple, Hiromu Matsura, *Yomi no Kuni*.

1. はじめに

平戸藩第10代藩主であった松浦熙^{まつらひろむ}は、寛政3年(1791)に松浦静^{まつらきよし}の三男として平戸城内で誕生した。文化3年(1806)に15歳で家督を継ぎ、天保12年(1841)に50歳で藩主を引退してからは、慶応2年(1867)に76歳で亡くなるまで、歴代藩主の中で唯一、平戸で生涯を過ごした人物であった。幼少期から西洋文化に触れる機会に恵まれ、洋書やテレスコープ(望遠鏡)、エレキテル(西洋の電気治療器具)など西洋の文物を収集しており、蘭癖と呼ばれるほどであった。在任中は財政難を打開するため、シジミ養殖や新田開発などの殖産振興の奨励に尽力した。松浦熙は藩政興隆に力

を注ぐ一方、宗教にも熱心であり、自身の氏神や神仏、祖霊を敬い、複数の社寺の再興、安満岳や志々伎山などの霊山への参詣を行った他、松浦熙が患っていた病を治療するため、平戸八十八ヶ所の霊場を参詣して整備も行っていったことから信仰心の強さが窺える。また、領内に八奇勝を選定して景勝地を愛でていたことや生涯のほとんどを平戸で過ごしていた点から領土愛の強い人物であったと考えられる。

本研究では、松浦熙が自らの菩提寺として整備した圓融山龍瑞寺^{えんじゆうざんりゆうずいじ}(現:善山普門寺^{ぜんざんふもんじ})の伽藍配置や構造物などの詳細を調査するとともに、熙が残した文書の記述内容を調査した。そして、松浦熙が行った藩事業における龍瑞寺整備の目的と藩における位置づけを明らかにした。

*連絡著者

2. 研究方法

本研究では、圓融山龍瑞寺整備中の「圓融山龍瑞寺並記」と整備後の絵図面である「圓融山龍瑞寺後圖」や「圓融山龍瑞寺御趣法帳」に記載された同時期の測量図から伽藍配置とその変遷を調査した。龍瑞寺の再興および墓所整備について内容を明らかにするため、「圓融山龍瑞寺御趣法帳」や「木勝詣人拝順記」等の文献調査、並びに境内の構造物について現地調査を行った。以下に調査項目および括弧内に調査史料を示した。

- 1 龍瑞寺の来歴（圓融山龍瑞寺永統御趣法帳）
- 2 整備、造成の変遷について（圓融山龍瑞寺永統御趣法帳、亀岡随筆）
 - 1) 墓所（圓融山龍瑞寺永統御趣法帳、亀岡随筆）
 - 2) 伽藍（圓融山龍瑞寺永統御趣法帳、圓融山龍瑞寺並記、圓融山龍瑞寺後圖）
- 3 植栽（圓融山龍瑞寺永統御趣法帳、亀岡随筆）
- 4 木勝拝順（圓融山龍瑞寺永統御趣法帳、木勝詣人拝順記）

3. 龍瑞寺の来歴

松浦家第21代当主松浦義（号：天叟）は第6代將軍足利義教によって肥前守に任じられた。松浦義は足利義教が赤松満祐に殺害されたとの知らせを受け、足利義教追悼の為に出家して法名を融義と称し、嘉吉3年（1443）に平戸勝尾岳中腹の善山普門寺を建立した。松浦義は、初めはそこに隠居したが、家臣が訪ねてくることが気に障り、木ヶ津に氣勝山妙幢寺を開山して移住した。文明2年（1470）に松浦義が逝去して妙幢寺は荒廃し、元禄元年（1688）に松浦家第29代当主、平戸藩第4代藩主の松浦鎮信が寺号を明河内の寺へ移して法雲山妙幢寺と称したために、氣勝山妙幢寺は廃寺となった。元禄8年（1695）には松浦家第30代当主、平戸藩第5代藩主の松浦棟は、木ヶ津の妙幢寺跡に大島の樹宝山西林寺を移し、蔭涼山松林寺と称した。その後、宝永2年（1705）には廟を改修し、圓融山龍瑞寺と改称した。この山号寺号は妙幢寺の開祖である松浦義の法名「融義」と松浦義が江向に開基した「龍瑞

庵」から名付けられた。文政元年（1818）からは松浦家第35代当主、平戸藩第10代藩主の松浦熙（図1）による再興が始まり、墓所整備も行われた。その後、神仏判然令によって勝尾岳中腹の善山普門寺が廃寺となり、明治3年（1870）に山号寺号および寺品が龍瑞寺に移され、現在は普門寺と称されている。年代と山号寺号の変遷を表1に示した。

4. 松浦熙の墓所整備について

龍瑞寺境内には松浦義が植栽した大杉があった。その杉は樹齢350年を超え、幹回りが6m余りあったと言われているが、文化11年（1814）の強風によって杉は根元から倒れてしまった。松浦熙は先祖が植えた杉を失ってしまうことを懸念して、その杉を材として文政元年（1818）に景肅堂（図2）を再建し¹⁾、大杉の跡地には石碑が建てられた。松浦義の350年忌日が間近だったことも景肅堂の再建および境内改修の発端となった（図3）²⁾。

松浦熙は若年時にある老人から自身の領内で隠棲すれば出費が抑えられ、領内の民衆にも益となることを聞き、藩主着任の頃から自らの墓所地を検討し、平戸領内での墓所の造成を定めていた²⁾。当初は中野村の神曾根山に松林の中の隠宅を構えて墓所とする構想を持っており、文政4年（1821）には松の植樹が行われ、10,180本の松が植えられたことも記録に残っている（図4）²⁾。また、神曾根山は松浦家第29代当主の松浦

義（天叟）① △ 豊久（天翁）② △ 弘定（覚翁）③ △ 興信（高齡）④ △ 隆信（道可）⑤ △ 鎮信（法印）⑥ △ 久信（泰岳）⑦ △ 隆信（宗陽）⑧ △ 鎮信（天祥）⑨ △ 棟（雄香）⑩ △ 篤信（松英）⑪ △ 有信（等覚）⑫ △ 誠信（安靖）⑬ △ 清（清山）⑭ △ 熙（觀中）⑮ △ 曜（諦乘）⑯

図1. 松浦家当主系図

数字は第n代当主を示す

表1. 寺号の変遷

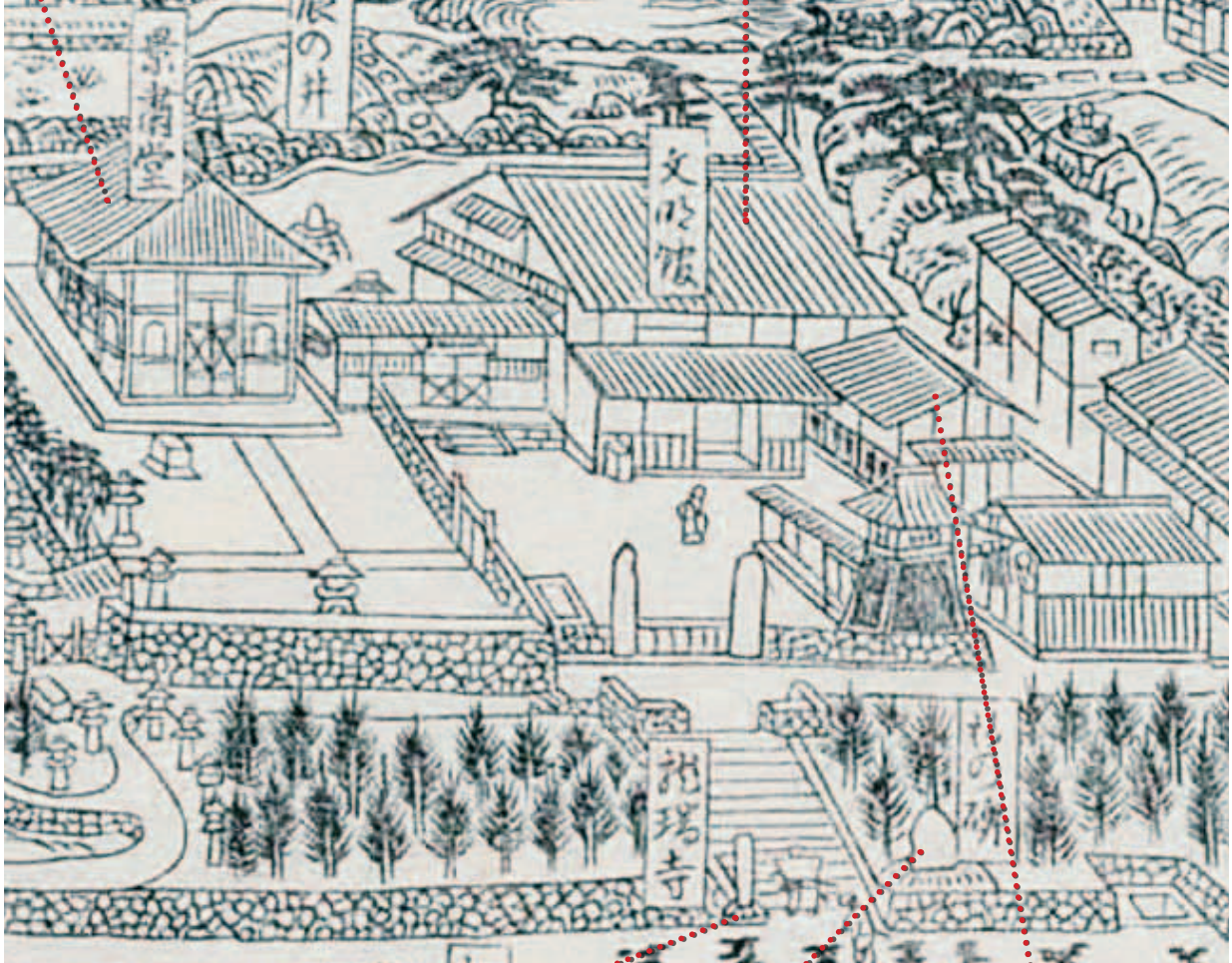
年代	所在地	山号寺号	備考
嘉吉3年(1443)	勝尾岳中腹	善山普門寺	天叟により開山
嘉永3年～文明2年(1443～1470)	木ヶ津	氣勝山妙幢寺	普門寺の末寺に天叟が移住し、山号を改称。文明2年に天叟が逝去。祭祀が途絶えて荒廃
元禄元年(1688)	明川内	法雲山妙幢寺	松浦鎮信が寺号を移し、木勝山妙幢寺を廃寺
元禄8年(1695)	木ヶ津	蔭涼山松林寺	松浦棟が木勝山妙幢寺跡に西林寺を遷寺
宝永2年(1705)	木ヶ津	圓融山龍瑞寺	松浦棟が山号寺号を改称
明治2年(1869)	木ヶ津	善山普門寺	神仏判然令により勝尾岳中腹の善山普門寺が廃寺となり、山号寺号および寺品を龍瑞寺に移転



②景肅堂 (外壁 670 × 830cm, 基礎 932 × 1156cm)



③文明館 (1978年改築)



圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)



①龍瑞寺



⑤大杉御碑 (90 × 110cm)



④御居間 (跡地)

図2. 参詣項目の現況

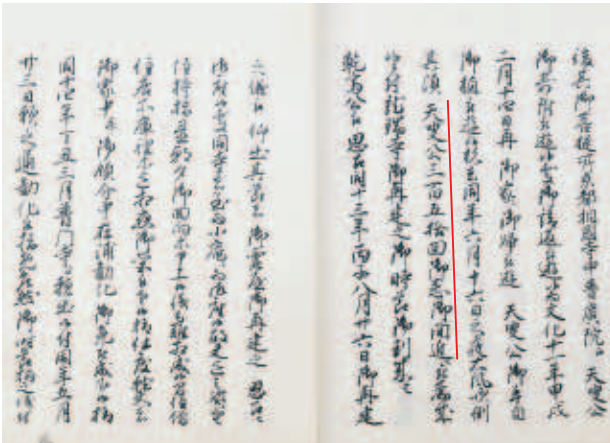


図3. 天叟の350年忌日を機に景肅堂を再建した記述
 圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)



図5. 寿塔 (65 × 142cm)



図4. 神曾根山に10,180本の松を植樹した記述
 圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

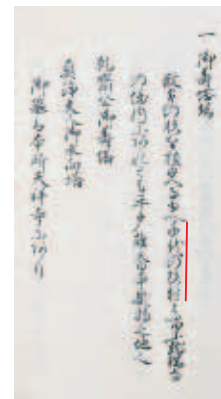


図7. 寿塔場が千代の杵村と呼ばれた記述
 圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

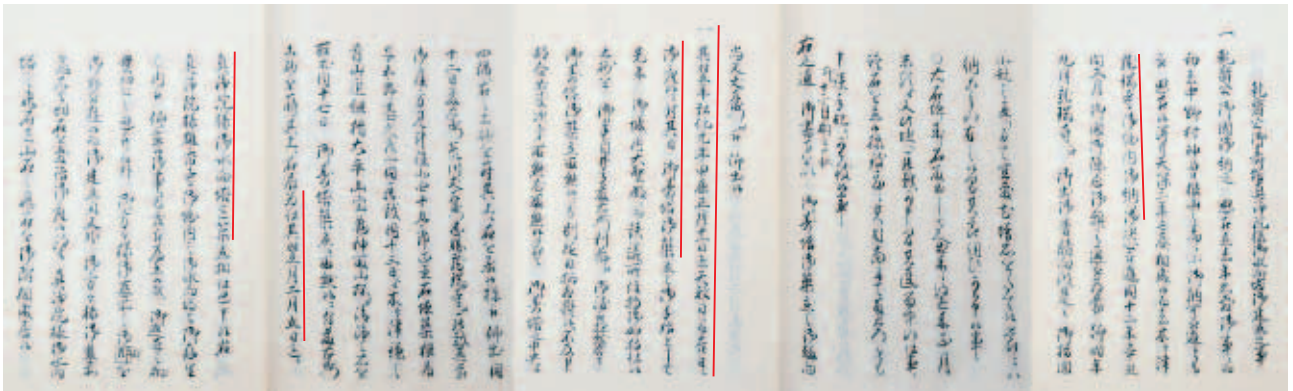


図6. 龍瑞寺に墓所が決定し寿塔と水向塔が建立された記述
 圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

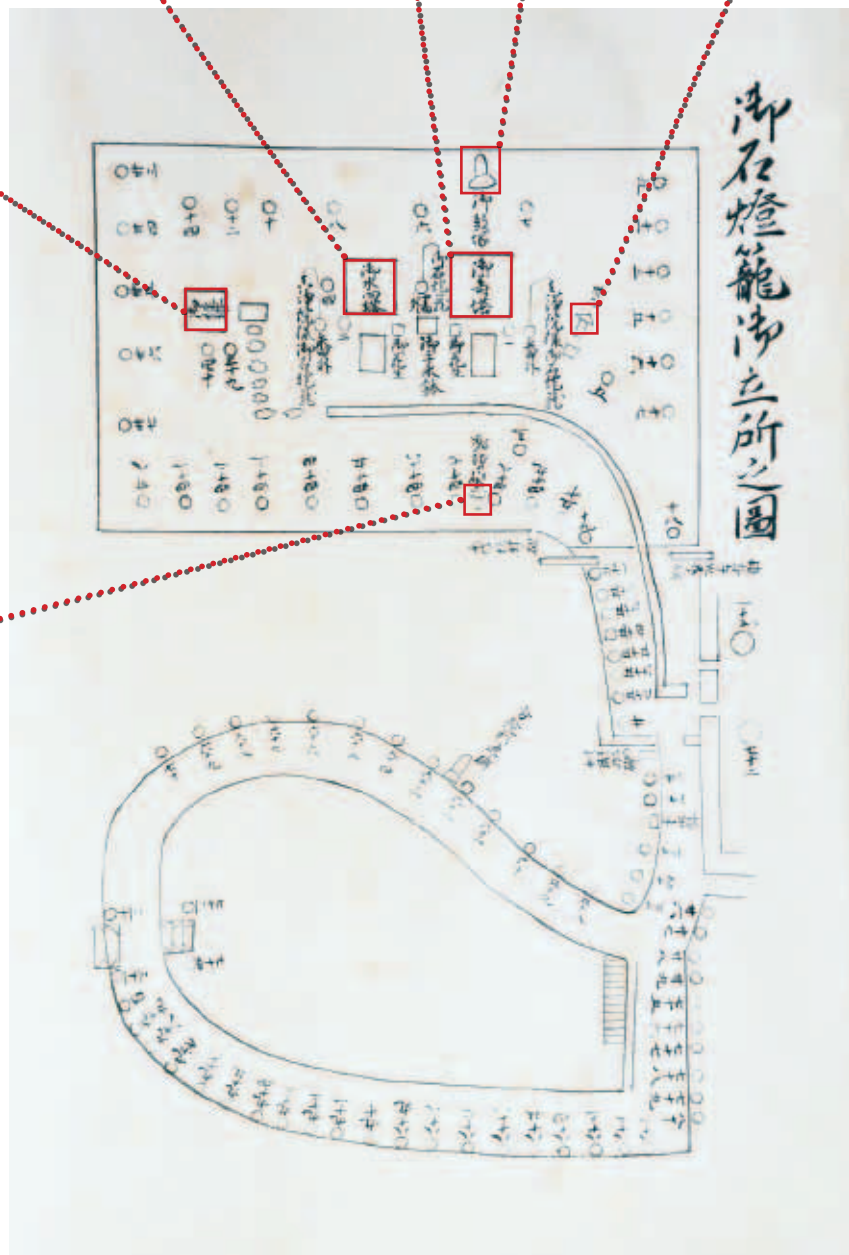


図8. 御石燈籠御立所之圖
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

鎮信の次男である松浦昌の御屋敷山でもあり²⁾、先祖に縁のある土地であったため、墓所の候補となったと考えられる。その後、龍瑞寺の整備を進める中で計画を変えて、天保3年(1832)に龍瑞寺境内に墓所の造成を決心したことがわかった。松浦熙は天保12(1841)年に隠居し、弘化元年(1844)に松浦熙の墓である寿塔(図5)を建立した。寿塔の隣には正室の秦姫の墓を雄香寺から移し、水向塔が建立された(図6)²⁾。この墓所は寿塔場と呼ばれ、松浦熙の趣向が反映されている。また、杉が多数植栽されたことから千代の杵村とも呼ばれた(図7)²⁾。寿塔場の入り口には御杉山口と刻まれた石杭が立てられ、無用の者の立ち入りを禁止する言葉も掲げられていた。

寿塔場には墓以外にもさまざまな造営が見られた。松浦熙の寿塔の前後には扇塚と鼓塚が建てられ、水向塔の左手には三部経塔が建てられた。寿塔の側には石宝塔も据えられた。また、松浦家の親族や家臣等からは百基の灯笼が献上され、寿塔場及び分陀利池の周囲

に配置されたことがわかった。この寿塔場一帯の造営された石造物に関しては、圓融山龍瑞寺永統御趣法帳に記載された「御石灯笼御立所之圖」(図8)²⁾にも見ることができる。現地調査では、寿塔の右手には松浦熙の母である蓮乗院の墓萱碑、三部経塔の隣には松浦熙の娘である秀姫の寿塔が後に移設されたことがわかった。以下に造成の詳細を記した。

1) 寿塔と水向塔

弘化元年(1844)3月2日に伊豫産の石を用いて松浦熙の墓である寿塔が建立された(図9)²⁾。寿塔は生前に建てる墓のことであり、寿塔を建てた先祖は長寿であったことに倣って、自らも寿塔の建立を決めた(図10)²⁾。塔の表には自筆で「当寺再興源朝臣熙之壽塔」と刻まれている。その翌月に、秦姫の墓が雄香寺から移され、寿塔の隣に水向塔が建立された。秦姫は既に他界し雄香寺に埋葬されていたため、移設後の水向塔には秦姫の毛髪が納められた(図11)²⁾。この双塔は

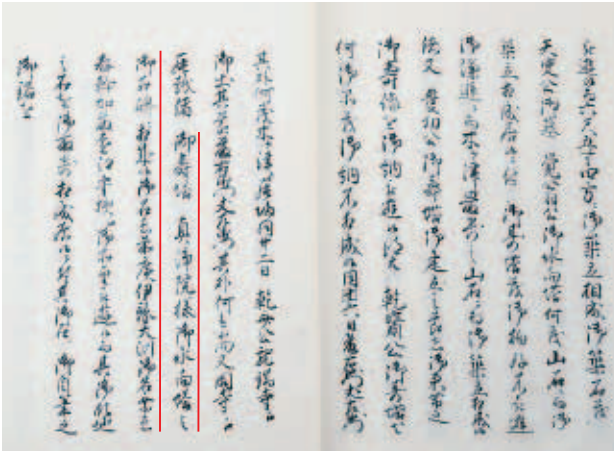


図9. 寿塔に伊豫産の石を用いた記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19×27cm)

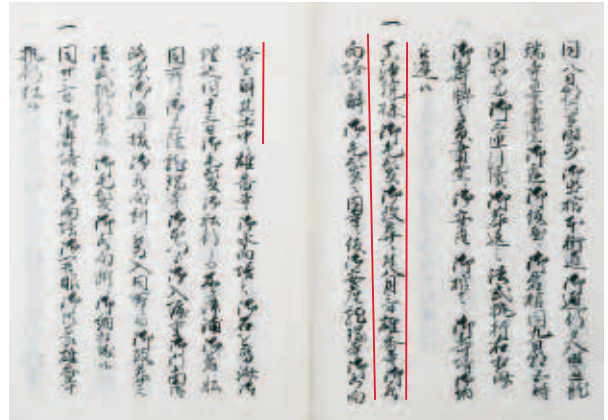


図11. 水向塔に秦姫の毛髪が納められた記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19×27cm)

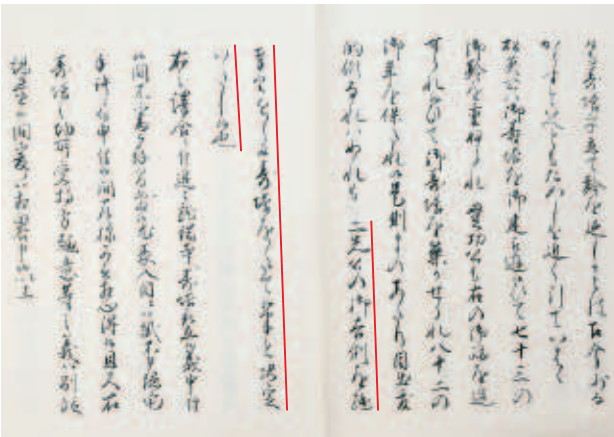


図10. 長寿の先祖に倣って寿塔の建立を決意した記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19×27cm)

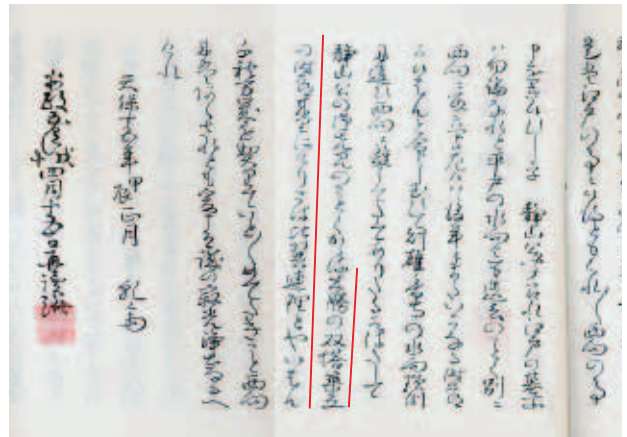


図12. 寿塔と水向塔が比翼連理に例えられた記述
亀岡隨筆(18×29cm)

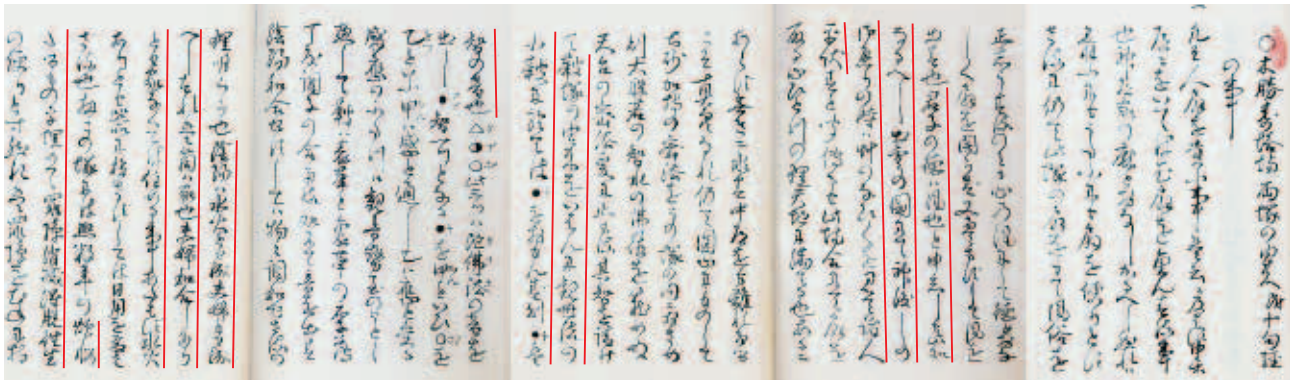


図 13. 扇塚、鼓塚の由来についての記述
 亀岡随筆 (18 × 29cm)

比翼連理にも例えられており (図 12)³⁾、夫婦の仲睦まじい様子が窺える。

2) 扇塚と鼓塚

寿塔の前後にある扇塚と鼓塚は、嘉永3年(1850)に建立されたと考えられる。扇塚、鼓塚は棲霞園内で行われていた能(申楽)で使用される道具の名に由来しており、亀岡随筆にそれぞれの由来や塚が建立された謂れが記されていた(図 13)³⁾。扇塚に関しては、「風というものは君子の徳であり、出雲の国では草がなびく音を聞いて神が帰っていくと考え、人々は平伏する」といわれており、土砂加持の密法を納めて、大般若の智水の仏教を籠めたこと³⁾が記されていた。鼓塚に関しては、「観世流の小鼓は阿佛法の音を表すものがあり、観音勢至のような音もある。また、鼓は表裏の両面の皮がちょうどよく和合することで音を出すため、陰陽のようである。陰陽が調和していないとどのようなこともうまくいかないことは言うまでもなく、火水や夫婦にも当てはまる。そうすると鼓の筒は家のようなのである。火や水があっても器がなくては利用することができないように、夫婦が仲睦まじくあっても、家がなくては住むことが出来ない」といわれ、この塚には松浦熙の煩惱を埋め、成仏の妨げとなる罪を消滅し、生死の苦しみを解脱することが祈られた。末代までもこの由来を忘れず、大切にするように³⁾とも記されており、松浦熙の本心を理解するように願われた。塚の裏側には仏縁のために十句観音経が彫られる予定であったこと³⁾も記されていたが、両塚の石質は固く目が立っていたため細かく彫ることができなかったために、別の石の正面全体に彫らせて大悲水の側に結縁のために建て、十句観音経御碑と称した。

3) 三部経塔

弘化元年(1844)に松浦熙の側室である幾世は浄土三部経を一字一石で写経し、地面に埋めて供養した(図 14)²⁾。その上に建てられた石碑が三部経塔である。石碑の文字は松浦熙によるものである。また、三部経塔は供養すれば無量無辺の功德を請けるといわれていた³⁾。

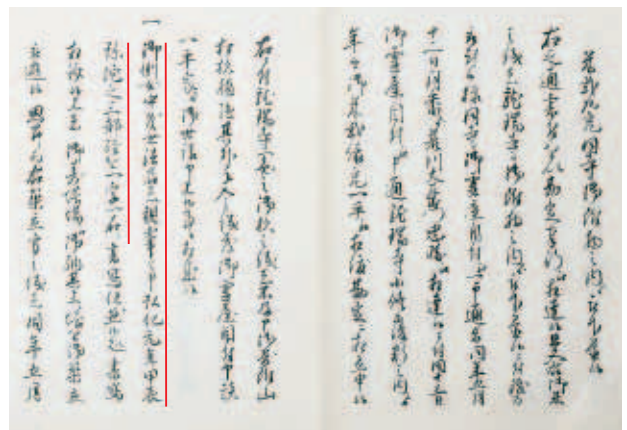


図 14. 幾世が浄土三部経を一字一石で写経した記述
 圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

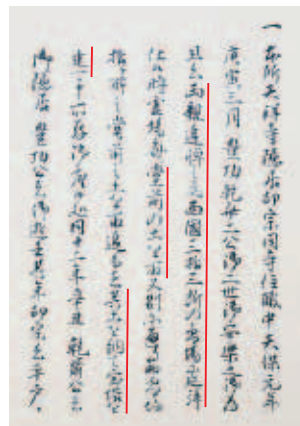


図 15. 西国三十三ヶ所霊場の土を納めて宝塔とした記述
 圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

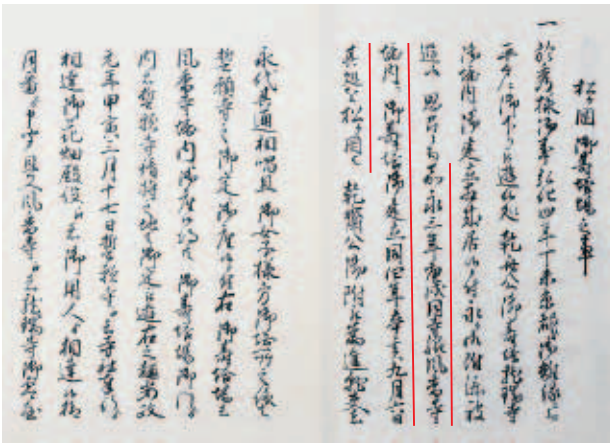


図 16. 秀姫の寿塔場を松ヶ岡と称した記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

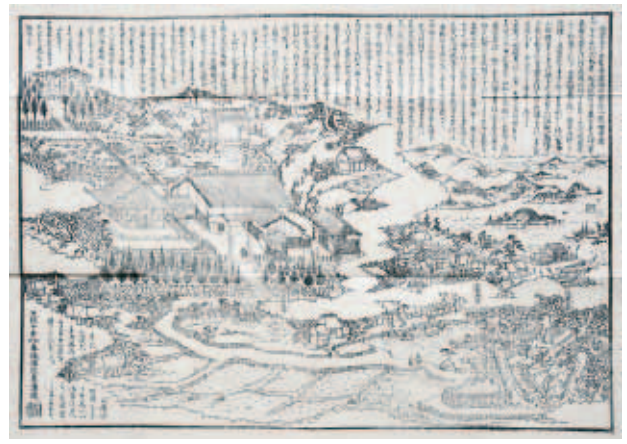


図 17. 圓融山龍瑞寺並記 天保10年(1839)(36×47cm)

4) 宝塔

向東山天祥寺の印宗禪師は、松浦清及び松浦熙の安楽、自らの両親の追悼のため、天保元年(1830)3月から西国三十三ヶ所霊場を巡拝している。三十三ヶ所それぞれの御堂の前では土を取り、その土を納めて宝塔とした(図15)²⁾。天保12年(1841)に松浦熙が隠居し、同年に松浦清が逝去したことに伴って印宗禪師は平戸を訪れ、宝塔を寄付した。宝塔の竿部分には小さな円形のガラス窓があり、那智山如意輪大土を模して造られた銅像が安置されていた。

5) 墓萱碑

松浦熙の生母である蓮乗院を称えた石碑である。平戸城内に建てられたものが後に龍瑞寺へ移されたと考えられる。

6) 秀姫の寿塔

秀姫は日野家に嫁入りし上京したが、弘化元年(1844)に離縁して平戸へ下った²⁾。その年に松浦熙が龍瑞寺に寿塔を建立したことを知り、自らも近くの風香寺に墓所を定め、天保4年(1833)に寿塔を建立し、寿塔場を松ヶ丘と称した(図16)²⁾。現在は秀姫の寿塔は松浦熙の寿塔場に移設されている。

5. 整備・造成による龍瑞寺の変遷

1) 境内の整備について

龍瑞寺再興と松浦熙の菩提寺の決定により、龍瑞寺境内にはさまざまな変化が見られた。「圓融山龍瑞寺並記」(図17)⁴⁾と「圓融山龍瑞寺後圖」(図18)⁵⁾や「圓融山龍瑞寺永続御趣法帳」に記載された2枚の測量図(図19, 20)²⁾からその様子がわかる。龍瑞寺の再興と整備には、側用人の荒川丈左衛門忠勝と井手藤右衛門利恭、石工の北四十五郎が大きく関わり、尽力していた。この3人の石像(図21)が造られ、それぞれ霊泉口、茶園口、蓮池口に守衛として据えられ

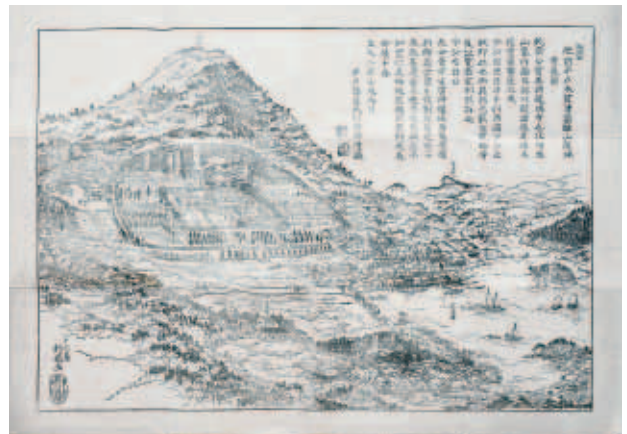


図 18. 圓融山龍瑞寺後圖 文久2年(1862)(41×56cm)

ている。石像の背面にはそれぞれ和歌が刻まれ、功績を称えている(表2)⁶⁾。荒川丈左衛門忠勝は龍瑞寺の規格を立てる親と子であると記述があり⁷⁾、父である荒川丈左衛門忠元の仕事を忠勝が継いでいたと思われる。忠勝は主に龍瑞寺の設計をしており、龍瑞寺周辺を調査して木勝詣人拝順記を作成し、境内の改修なども行っていた。天保10年(1839)からは松浦熙の命を受け、29年の歳月をかけて圓融山龍瑞寺永続御趣法帳全60巻を執筆した²⁾。井手藤右衛門利恭は主に建築に関わった人物であり、荒川丈左衛門忠勝の龍瑞寺周辺の調査を基に圓融山龍瑞寺後圖の作成も行った。北四十五郎は、築山を天然にできたもののように仕立てた人物といわれ⁷⁾、文明館裏手の築山の造成や各石碑の彫刻、石垣の造成などを行ったと思われる。

2) 龍瑞寺および周辺の伽藍について

龍瑞寺再興の始めには景肅堂が再建された。本尊は地藏尊で松浦義の自作である。その右側には赤烏帽子姿の松浦義の木像(図22)があり、左側には松浦熙自作の寿像(図23)が安置されている。松浦熙が神

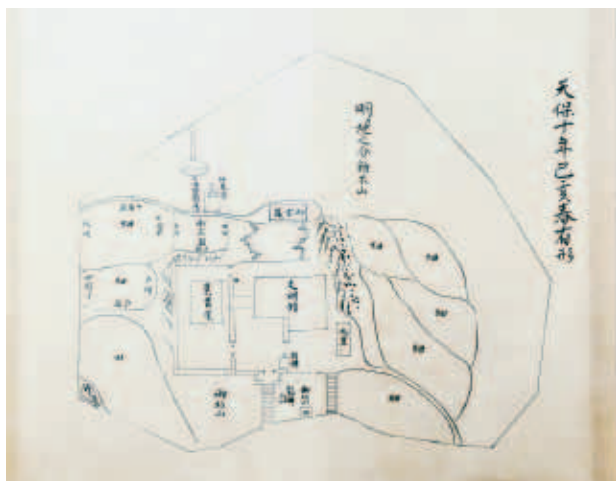


図 19. 天保 10 年(1839)の測量図
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19 × 27cm)

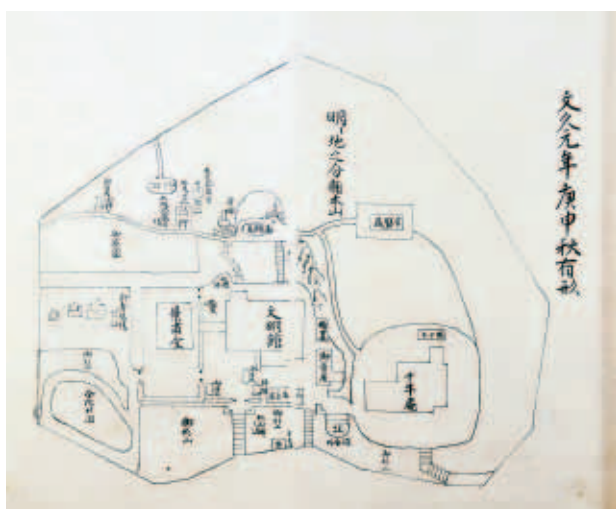


図 20. 文久元年(1861)の測量図
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)

龍の鎧を着用した姿の肖像画(図 24)を景肅堂に安置した記録もあった(図 25)²⁾。地藏尊が描かれた大杉小口の衝立(図 26)や松浦熙の父松浦清が描いた天叟手栽杉樹南面圖および北面圖(図 27)から景肅堂に用いられた杉の大きさが推察できる。材には松浦熙が大切にしていた杉を用いているため、景肅堂内での火の使用を禁止しており、線香も不要であるとの記述も見られた(図 28)²⁾。景肅堂には奉獻されたものが多数あり、中には玉燈の記述(図 29)²⁾もあったが、使用されたか否かは不明である。第 11 代藩主松浦曜からは石燈籠が奉獻され、景肅堂の正面に据えて常夜燈とした。

景肅堂再建の後、文明館の改修も行われた。文明館は松浦義が文明年間に居住したことに因んで名付けられた本坊であるが、茶屋として使われる機会が多かつ



荒川丈左衛門忠勝 (50 × 135cm) 井手藤右衛門利恭 (50 × 124cm) 北四十五郎 (50 × 62cm)

図 21. 石像

表 2. 石像の和歌

名前	原文	読み仮名
荒川丈左衛門忠勝		
靈泉口守衛	治世馬田毛	ちよまでも
	有呉可努表	うごかぬのりを
	多庭鳥九峰	たてければ
	此意野登子濃	このいのとしの
	智加羅也計利	ちからなりけり
井手藤右衛門利恭		
茶園口守衛	用理二容累	よりにより
	胡々呂廻糸乎	こころのいとや
	宇介通宜天	うけつぎて
	阿味弘君巴	あみひろきみは
	固農翁也計利	このおきななりけり
北四十五郎		
蓮池口守衛	神代與里	かみよより
	安留左万三寸流	あるさまみする
	以波具美八	いはなみは
	未南巨乃比土能	みなこのひとの
	太久民也計利	たくみなりけり

たとの記録がある(図 30)³⁾。現在は老朽化に伴い、鉄骨で修復されている(図 2)。

文明館の東手には天保 12 年(1841)に十牛庵^{じゅうぎゅうあん}が建立された。この名は盤珪和尚から十牛図が寄付されたことに由来する。十牛庵は方丈庫裡として建立されたが、本坊が引き移され、文明館は茶屋として扱われるようになった(図 31)²⁾。十牛庵は景肅堂の防火対策として渡り廊下は設置されず、本堂から距離をおいて建立されている。十牛庵が東の方に建てられた理由として、風は西から吹くことが多いため、景肅堂の西側に建築物があって火災が起こった場合、景肅堂に燃え移る危険性があることが記されていた(図 32)²⁾。十牛庵には竈が設けられていたことが間取り図(図 33)からも確認できることから、最も重要な建物である景肅堂から十牛庵を遠ざけたものと考えられる。



図 22. 天叟の木像 (28 × 30cm)



図 23. 熙の寿像 (35 × 35cm)

文明館の裏手には宝蔵が造営された。その後、同所に満願水が湧出したために宝蔵は移設された。嘉永5年(1852)に宝蔵は再建され、常磐蔵と称された。蔵内には第12代藩主松浦詮によって記された常磐蔵記(図34)があり、蔵の歴史が記載されている。

松浦熙が龍瑞寺を訪れた際、木ヶ津の美しい景色を眺めようとしたが、文明館は木立の間に建っていたため眺望が良くなかった。弘化2年(1845)に鎮守と満願水の間の高台に小亭が設けられ、翌年に醒眠亭と名付けられた²⁾。弘化4年(1847)には、日野家に仕えていた絵師、澤渡精齋廣繁が平戸を訪れた際に龍瑞寺へ滞在させて醒眠亭からの景色を詠ませ、醒眠八景が作成された(図35)。澤渡精齋廣繁は平戸領地方八奇勝を選定した人物である。その後、松浦熙は病で平戸城へ戻り、醒眠亭を利用できなくなったため、醒眠亭は嘉永6年(1853)に平戸南にあった観月楼跡へ移され、還月舎と改められた(図36)²⁾。醒眠亭跡地には嘉永7年(1854)に醒眠八景が刻まれた醒眠八景之碑が建てられた。表3に原文と現代語訳を記した。

龍瑞寺の隣には大悲山風香寺が開山された。風香寺は無量庵、報謝堂、桔梗屋、風香軒の四棟から成り、嘉永4年(1851)に総称が風香寺と定められた⁶⁾。風香寺は熙の側室である幾世の隠棲の為に建立された寺

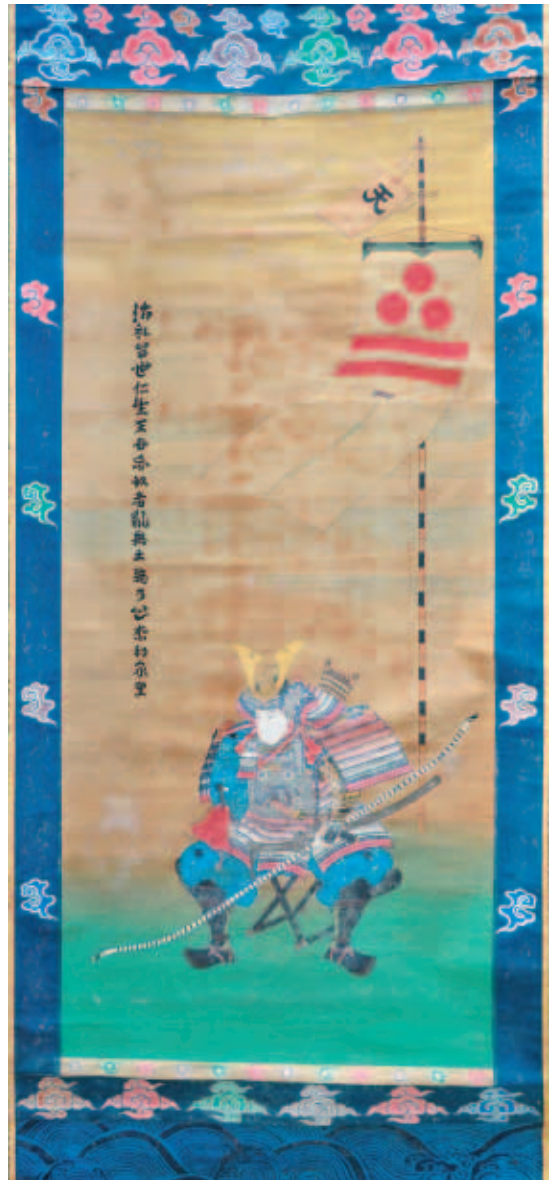


図 24. 熙が神龍の鎧を着用した肖像画 (237 × 88cm)

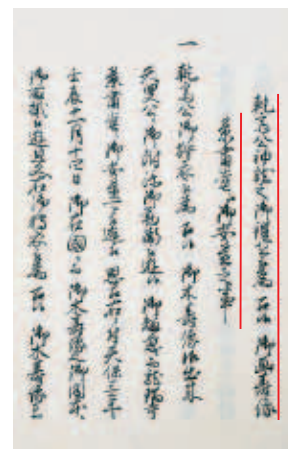


図 25. 熙が神龍の鎧を着用した肖像画が景肅堂に安置された記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19 × 27cm)



図 26. 大杉小口の衝立 (118 × 127cm)



図 27. 天叟手栽杉樹北面圖及び南面圖 (62 × 44cm)

で、開基は松浦熙、開山は幾世によるものとされる。本堂は無量庵と呼ばれ、本尊は松浦熙自作の阿弥陀如来である。側室の幾世は平戸城内に無量軒と呼ばれる個室を与えられており、松浦熙自作の像を仏壇に安置していた。無量庵に移る際には像と共に移り、それを本尊にしたとされる²⁾。

報謝堂は仏恩報謝のために建立された常念堂である。松浦熙は恵照院にて常念仏を知り、文政6年(1823)には常念堂の造営を考案していた。その後、天保3年(1832)の両山参りの際に常念仏の教えを感得したとされ、常念堂の略図も作成された²⁾。天保14年(1843)には拙岳和尚と梅谷津偕楽園の園主であった梅谷鵬友が、龍瑞寺の西南手の畑の中に隠宅を引き移し、常念堂として建立した(図37)²⁾。

桔梗屋は二階建ての家屋で、幾世の住居であった。1階は阿里廼屋と呼ばれる座敷で、和名類聚抄に桔梗の和名が阿里乃比布木と記されていたことから、その頭の仮名を取って名付けられた(図38)³⁾。2階は露光亭と呼ばれる座敷であった。この名は和歌六帖に記載されている「きちかう(桔梗)」に、「あきの月ちかう照すと みえつるは 露にうつるふ 光なりけり」と歌われていることから、その歌の心を取って名付けられたと亀岡随筆に記述があった(図39)³⁾。また、桔梗屋は幾世だけの利用に限られず、女中や来客の宿泊所にも利用され、女中が老後に隠棲することもできた。この家屋を松浦熙は後世までも存続させることを望み、「きちかうの 花のゆかりの あせもせで 千とせの秋も 色ふかくさけ」という和歌を扇型の額に残したとされる(図40)²⁾。

風香軒は、拙岳和尚が長崎から平戸へ移転・隠棲する際に建立された家屋である。風香軒の2階は遠観楼と呼ばれた。遠観楼からの眺望は優れていたため、遠観楼八景が定められて額に記された(図41)。

松浦義の墓所であるおぢの尾山には究竟堂が建立された。現在、究竟堂は現存していないが、図(図42)²⁾から堂内に3つの宝殿があったことがわかった。本尊は薬師如来で、天保2年(1831)に松浦熙が江戸屋敷

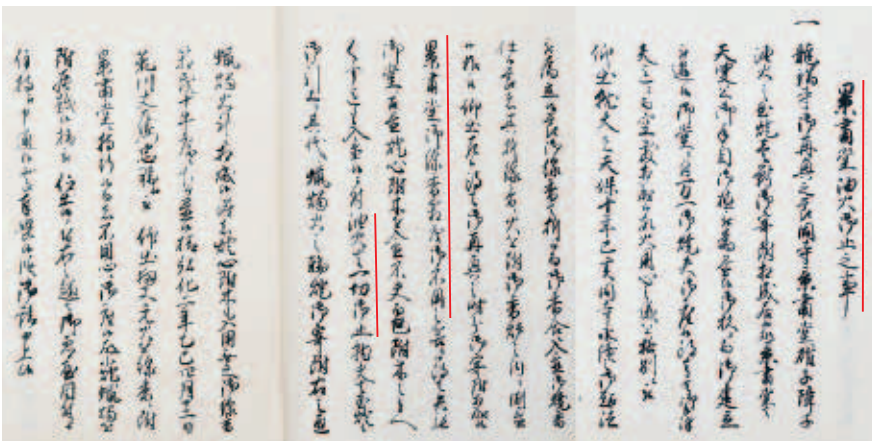


図 28. 景肅堂内での火の使用を禁止した記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19 × 27cm)

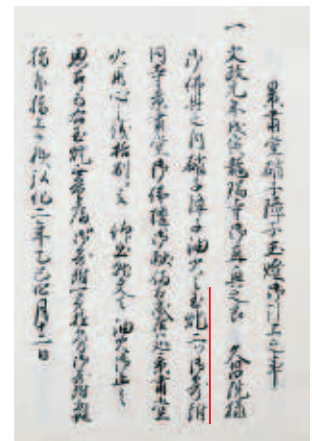


図 29. 玉燈が寄付された記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19 × 27cm)

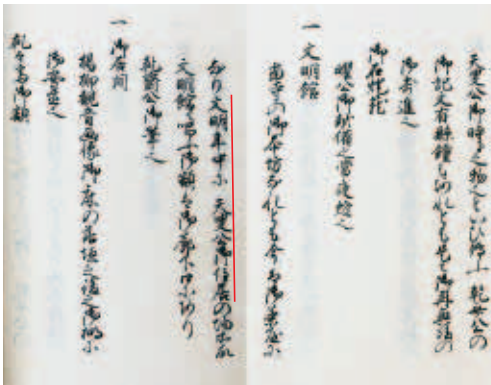


図30. 文明年間に松浦義が文明館に居住した記述
亀岡随筆 (18×29cm)

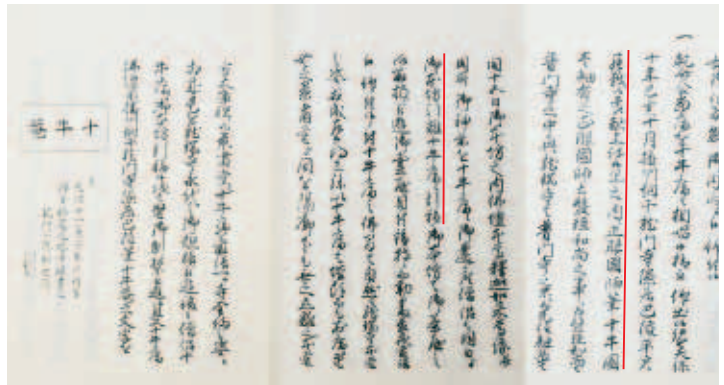


図31. 十牛庵の由来と本坊が引き移された記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

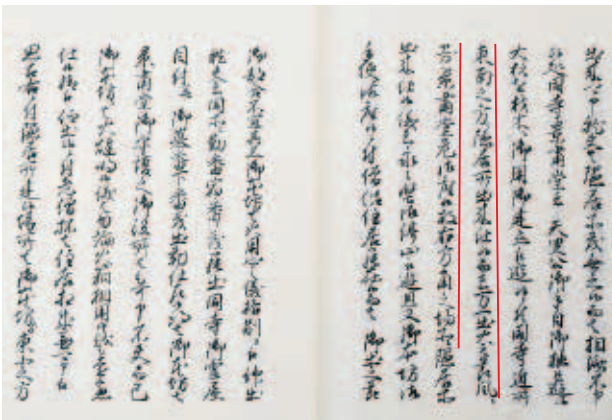


図32. 十牛庵が景肅堂の東に建立された理由について
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)



図34. 常磐蔵記 (29×56cm)

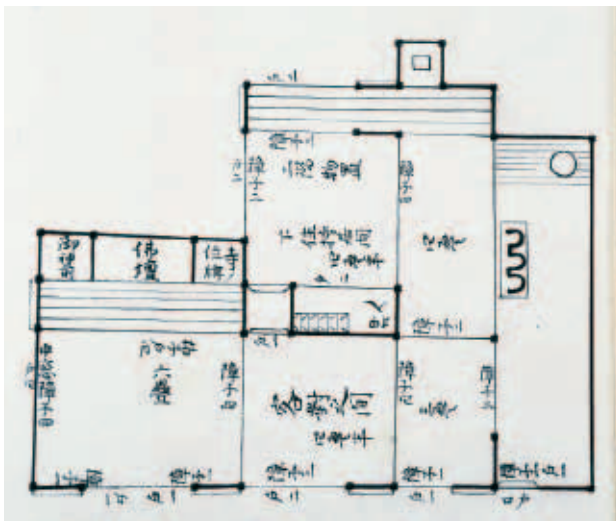


図33. 十牛庵の間取り図
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

で目撃したという薬師如来を模して造られたものであり、正面の宝殿に安置されていた (図43)²⁾。右の宝殿には日光裏見瀧にある荒浄不動尊の掛物が安置され、徳川家康が国を平和に納めていることへの恩を生涯忘れぬことを趣意として永代安置することとしていた²⁾。左の宝殿には松浦熙の守枕が安置された。この枕は松浦熙が数十年大切にしていたもので、枕の中には御守袋等が納められていた。目覚めているうちに神仏への崇敬を忘れないことは常のことであるが、就寝中にも神仏の加護に憑ることを趣意としており、松浦熙の得脱往生と万世不朽の権化、領土の安全を守ることが願われている (図44)²⁾。前立仏としては聖観音菩薩が安置された。これは松浦熙の反古 (書き損じの紙) を用いて作られたものだという (図45)²⁾。薬師如来は秘仏とされていたため、代わりに常時開帳して仏縁が結べるように願われた。究竟堂には「浄瑠璃のひかりを請けて 極楽に 照らしわたせる 究竟の峰」と和歌が詠まれている (図46)²⁾。究竟の峰とは御堂のあるおちの尾山を指していると考えられ、そこに照らし合わすように向かい合っているのは龍瑞寺である。このことから、龍瑞寺が極楽浄土に例えられて造成されていたことが推察できる。

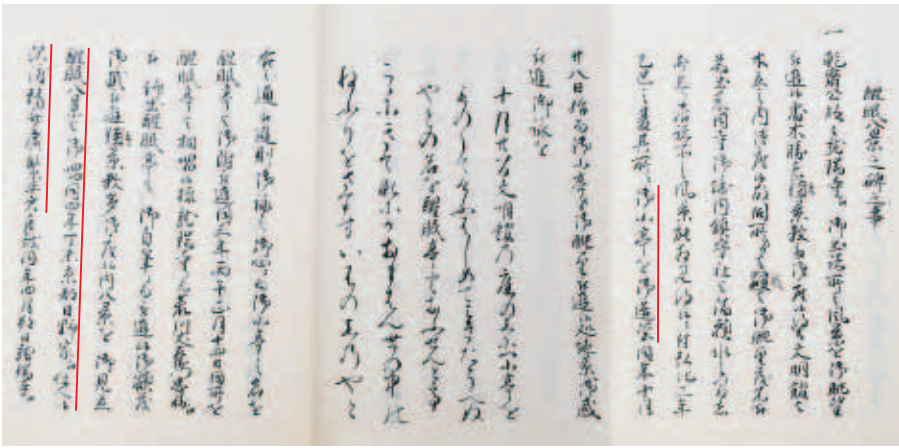


図35. 醒眠亭の造営と醒眠八景の選定についての記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

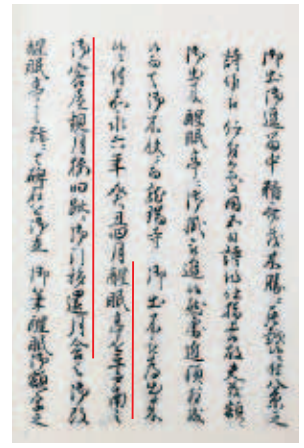


図36. 醒眠亭を移設した記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

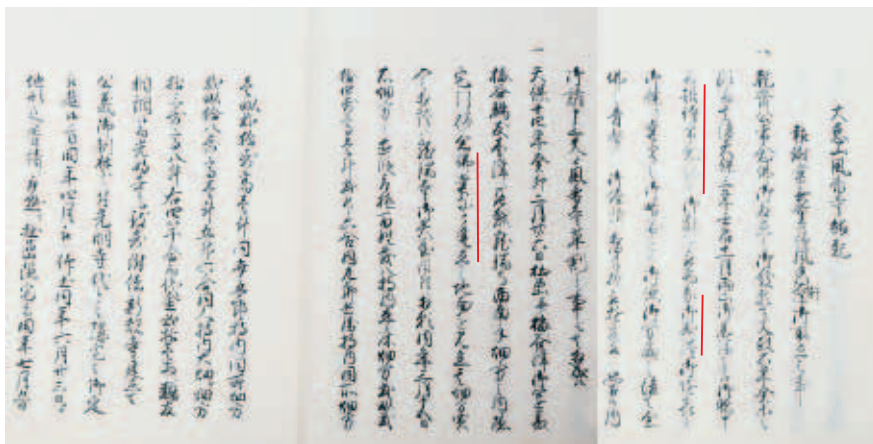


図37. 常念仏の感得と常念堂建立についての記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

表3. 醒眠八景

八景	原文	現代語訳
廟堂朝暉	碧甍魏々想靈威紅旭高揚燦錦輝 群庶極心懷德厚千秋萬歲仰光暉	碧色の瓦葺きは厳かで靈威を持っているように想う。紅色の朝日が昇り、帳が錦に煌めく。さまざまなことを極めて知ることは品性を豊かにし千秋万歳の光輝を仰ぐ。
内庭靈泉	紺苑接山尤莫然感靈曾是湧清泉 石間沙浄通深洞濺出涓々伴静禪	紺色の庭と山の接目は当然天然であると魂に感じられる。清泉が湧き、石の間の砂で清められ、深洞に注ぎ出して細く流れている様は静まる禪に伴う。
茗園膏雨	滿山膏雨養春芽便見森々新翠加 摘取焙烘香味美可知德潤澤無涯	満山の恵みの雨が春芽を養う。即ち、見る森々に新緑が加わり、摘み取って焙煎すると香味は美である。これは知るべきであり、徳が潤って澤の端はなくなるだろう。
社前涼風	神靈有驗物皆然況覺南薰來九天 林樾交枝葉先動胸襟爽氣自如仙	神靈のしるし有る物は皆なおさらそうであるが、南風が宮中より来るのが感じられる。林の木陰の枝を交えて葉が先ごろから動く。胸の内がさわやかな気分になって、自分が仙になったかのような。
滿面月影	佛氏曾言銀世界仙家多比玉華宮 地雄景勝説難盡滿面顯光浮碧空	釈迦が見たという銀世界は仙人の住家であり、玉華宮の優れた地に比べられることが多い。優れた景色を全て説き尽くすことは難しい。満面の白い光が青空に浮かんでいる。
連嶺雪光	漫山塞壑疑無地籠樹入雲如是清 積得重々連嶺上飛來片々又何輕	山一面が雪で覆われ、谷を塞いで地が無いのかと疑ってしまった。木は包み隠され雲に入っているようである。清い積みを得て連嶺の上は重々しいが、どうして飛び来る片々は軽いのだろう。
山上仏灯	靈龕高在翠微上一默寶燈生慧輝 萬籟寥然徹長夜却疑螢耀不曾飛	靈を納めた厨子は高く、遠方に霞む山の上にある。宝燈は静かに知恵の輝きを生じさせ、風に吹かれた物の音だけが聞こえ、空虚でひっそりと静まり返っている。長い夜を徹し退いて見ると、飛ばない螢の輝きかと疑う。
隣寺梵音	上方隣比隔雲林朝夕誦經鐘磬音 山色泉聲亦清淨教人自起菩提心	上方の隣家は雲林を隔てており、朝夕の経を唱える声や鐘磬の音が聞こえ、山の景色や川のせせらぎは清浄で、自ら菩提の心を起こさせる。

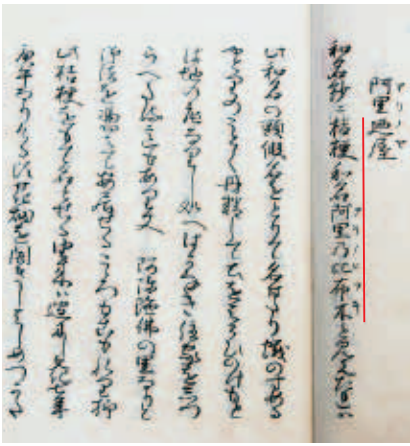


図38. 阿里廼屋の由来についての記述
亀岡随筆 (18×29cm)



図41. 遠観楼八景 (115×29cm)

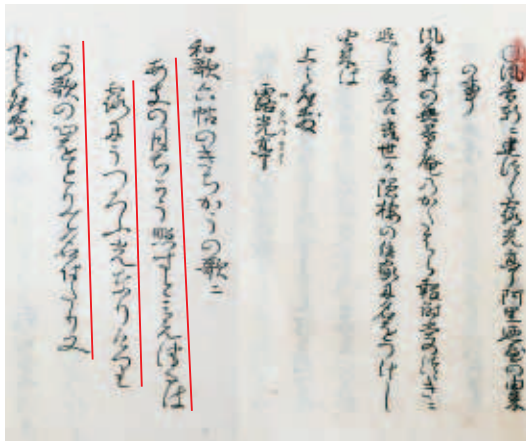


図39. 露光亭の由来についての記述
「あきの月 ちかう照すと みえつるは
露にうつろふ 光なりけり」
亀岡随筆 (18×29cm)

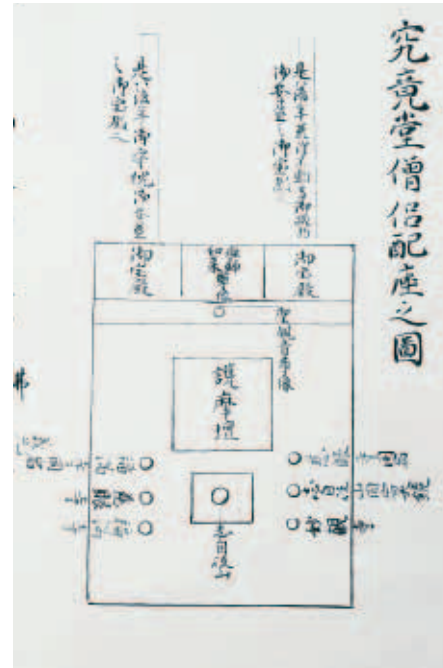


図42. 究竟堂の図
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

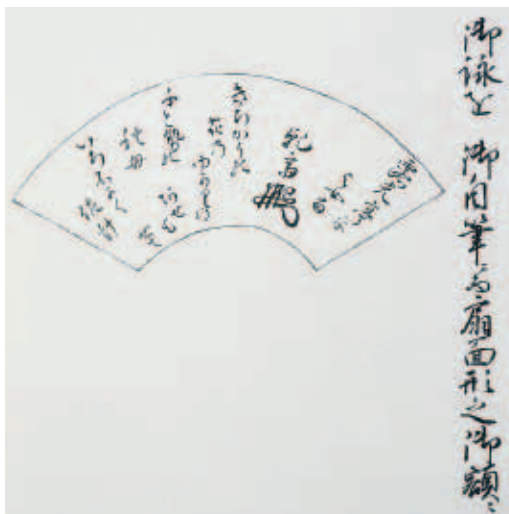


図40. 和歌が詠まれた扇型の額
「きちかうの 花のゆかりの あせもせで
千とせの秋も 色ふかくさけ」
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

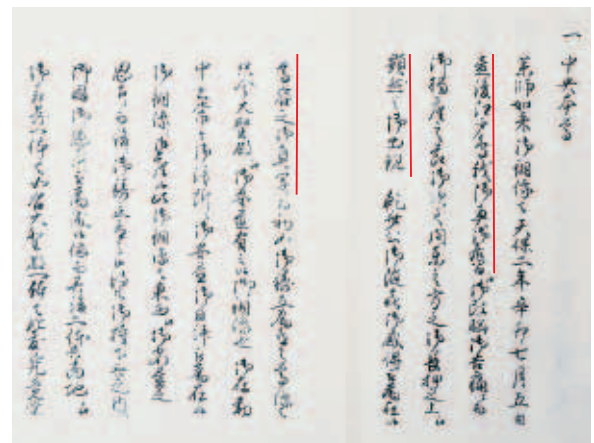


図43. 熙が江戸屋敷で見た薬師如来を模刻し
究竟堂の本尊とした記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

3) 井戸・湧水に関連した整備

寿塔場のすぐ下には分陀利池(図47)が造成された。これは整備前にあった種漬池を拡張して造成されたものである。松浦熙は生母の蓮乗院を思い、母の名に因んでこの池に蓮を植えたとの記録があった²⁾。白蓮は

梵語で分陀利といい、池の名は植えられた蓮に由来する⁷⁾ことがわかった(図48)。池の水は防火用水であった。

文明館裏手の御庭口では文政10年(1827)に築山が造成された。同所に宝蔵が造営されたが、安満岳に

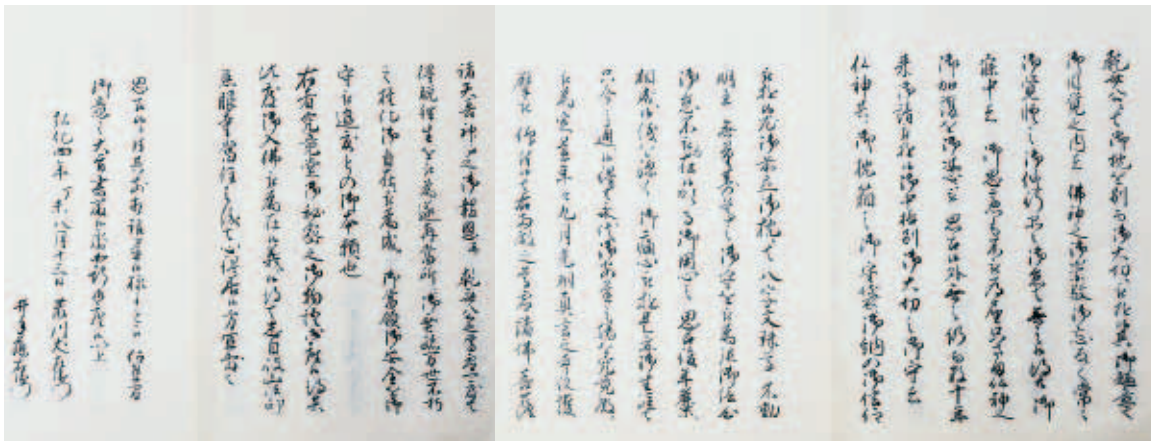
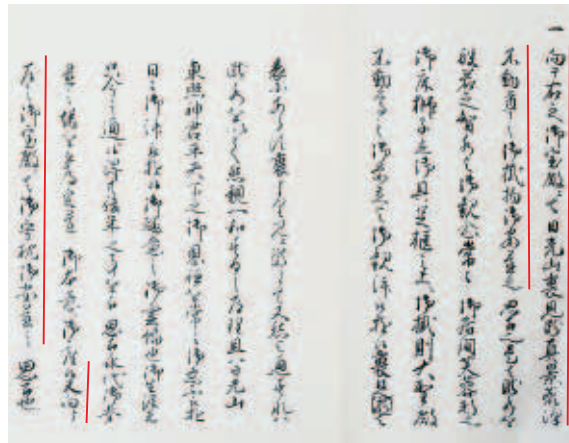


図44. 究竟堂の左右の宝殿についての記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19×27cm)

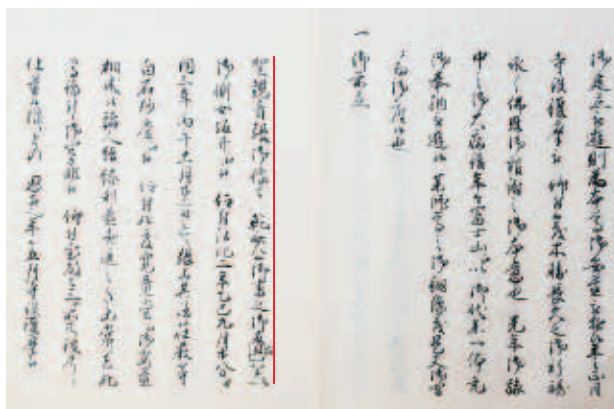


図45. 前立仏に反古を用いた記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19×27cm)

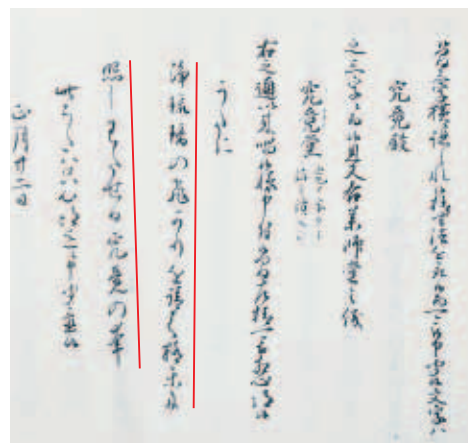


図46. 究竟堂の和歌の記述
「浄瑠璃の ひかりを請けて 極楽に 照らしわたせる 究竟の峯」
圓融山龍瑞寺御趣法帳(19×27cm)

清泉湧出祈願をしたところ水が湧き出したため宝蔵は移設され、現在の常磐蔵となった。湧水は湧き出した経緯に由来して、満願水と称され(図49)²⁾、宝蔵のあつ

た場所にできた池は満願泉と呼ばれる。満願泉は分陀利池と同様に防火用水である。満願水の側には水神が祀られ、祠には八大龍王霊泉尊神(図50)と記銘が



図47. 分陀利池



図50. 八大龍王霊泉尊神 (45×72cm)

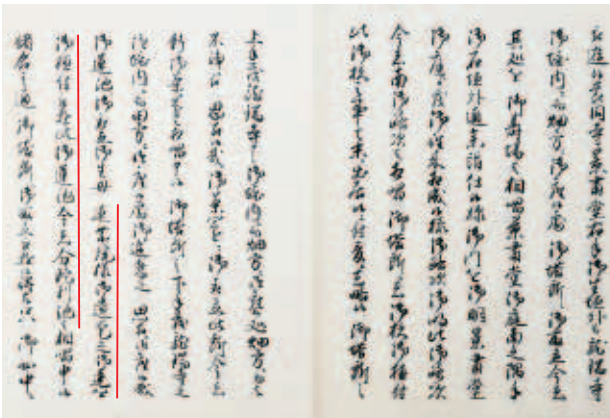


図48. 分陀利池の由来についての記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

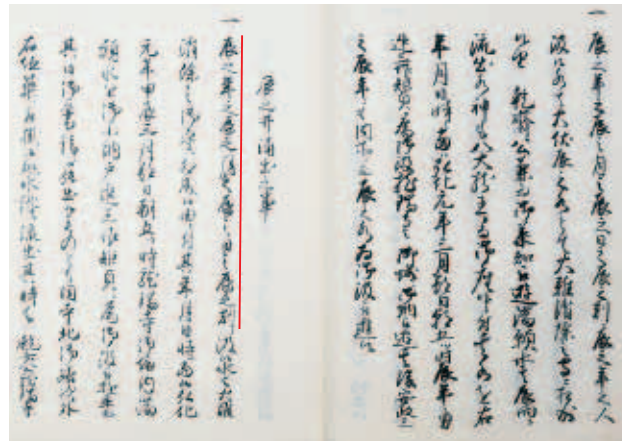


図51. 辰之井の由来についての記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

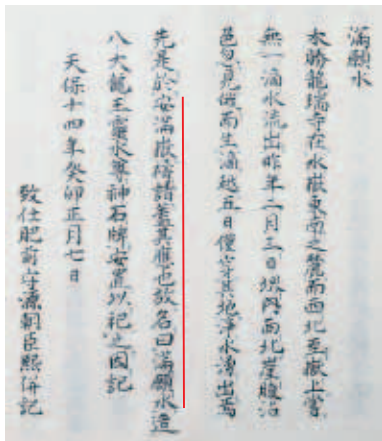


図49. 満願水湧出の由来についての記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)



図52. 九如燈の笠「天保九如」の文字 (55×24cm)

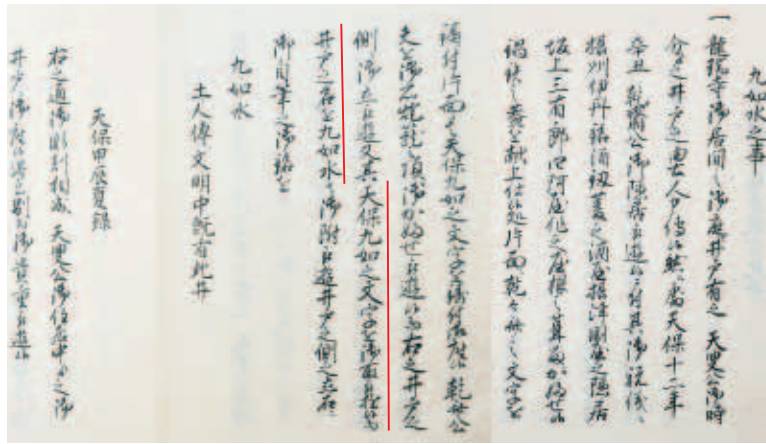


図53. 九如水が天保九如の文字に由来する記述

圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

ある。これは松浦熙による筆である。

弘化元年（1844）甲辰3月31日にも水が湧き出していることがわかった。その日は、辰の年、辰の月、辰の日であったことに由来して辰之井と呼ばれた（図51）²⁾。洞内には不動尊像が安置され、辰之井のすぐ上には井戸の由来等を記した石碑が建てられた。

辰之井の正面にある井戸は九如水と呼ばれている。三方向に井筒があり、井筒には「九如水」の文字と「土人傳 文明中既 有此井」と刻まれている。趣法帳の記述からも松浦義の時代からあった井戸であることがわかった²⁾。九如水の隣には灯籠が据えられており、九如燈と呼ばれる。灯籠の笠は松浦熙が隠居する際に倚州伊丹の酒屋、津国屋の隠居である坂上三有郎から献上されたものである²⁾。鉄製で四方屋作りをしており、片面には乾々齋、反対側には天保九如の文字（図52）が施され、松浦熙の長寿が願われている。九如水はこの天保九如の文字に由来して付けられたとの記述もあった（図53）²⁾。

4) 植栽について

天保14年（1843）には寿塔場に多数の杉の植栽が行われた。圓融山龍瑞寺御趣法帳には仏説百八の数を表して108本の杉が植えられたと記されており（図54）²⁾、百八煩惱を払うことを願って植えられたと考えられる。杉が植栽されたことによって寿塔場は千代の杵村と呼ばれ、その名が彫刻された石碑（図55）も造成された。

風香寺には桔梗屋の由来ともなった桔梗が植栽された。この桔梗は文政7年（1824）の棲霞園を表した御花畑之図に描かれている花壇迷路の中に植えられた百艸の一つであり、側室の幾世が自室の庭に移植した記述が残っている³⁾。それから35年が経過しても桔梗は繁茂した。幾世は桔梗に関する吉事が巡り巡って、自身の隠棲する住居が無事に完成することとなり、風香寺にも桔梗を植栽したという（図56）³⁾。

辰之井の石碑の近くには樹木を移植した記録があった。弘化元年（1844）には小値賀の阿弥陀寺にあった

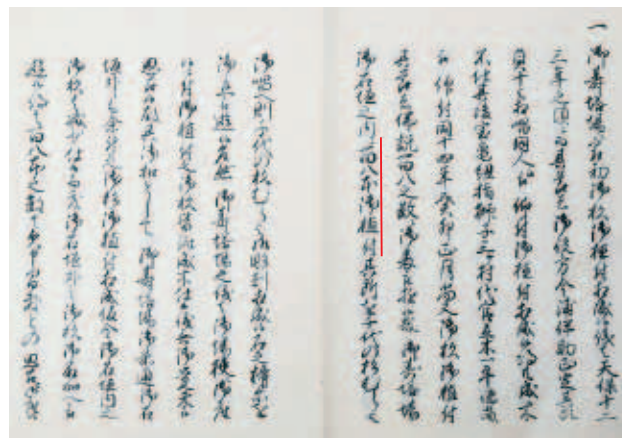


図54. 寿塔場に杉を108本植栽した記述

圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)



図55. 千代の杵村の石碑 (9×83cm)

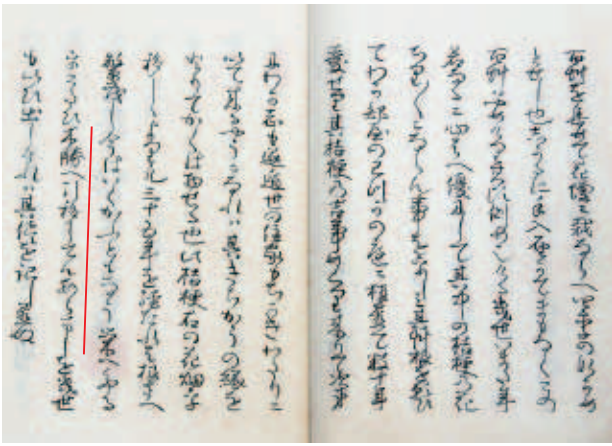


図56. 風香寺に桔梗を植栽した記述
亀岡随筆 (18×29cm)

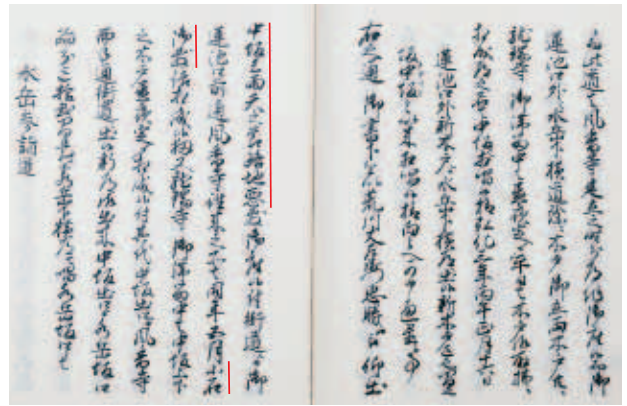


図60. 中坂が整備された記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

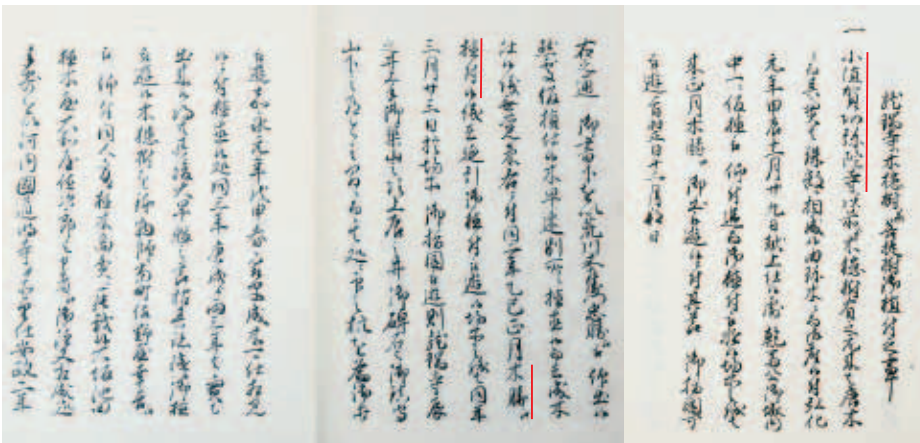


図57. 阿弥陀寺から木樨樹が移植され、枯死した記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

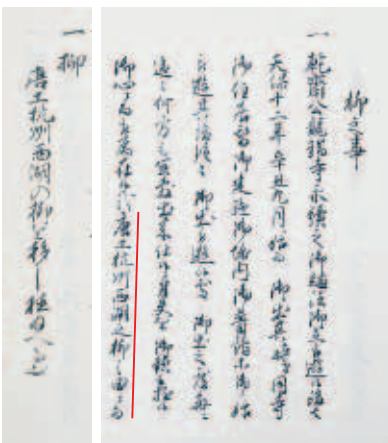


図58. 中国杭州の西湖から
柳を移植した記述

木勝詣人拝順記 (20.5×13cm) 左
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm) 右

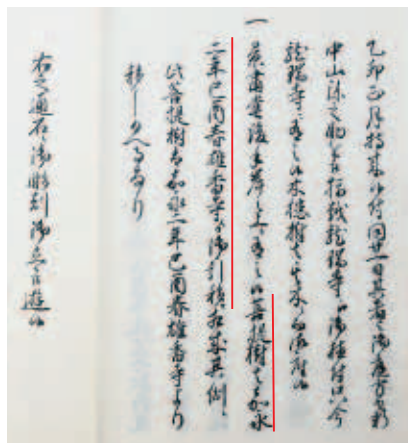


図59. 雄香寺から菩提樹を移植した記述
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)



図61. 小石が敷き詰められた中坂

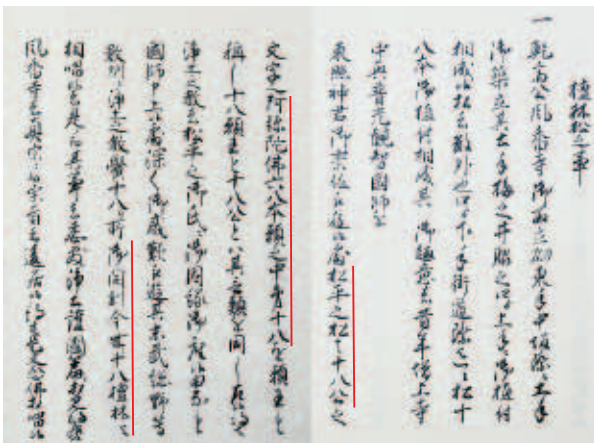


図62. 壇林松の由来についての記述

圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)



図63. 観音桜の碑 (40×77cm)

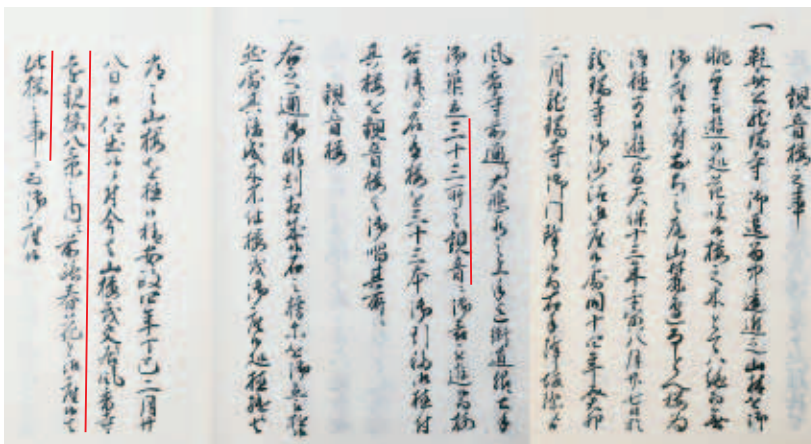


図64. 観音桜の由来と遠観楼八景の一つであった記述

圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

木榎樹が献上され、平戸城内に一度仮植えした後、龍瑞寺に移植した²⁾。種子は数珠の材料となるもので、嘉永元年(1848)に種を実らせたが、嘉永3年(1850)には枯死してしまったとの記述もあった(図57)²⁾。弘化4年(1847)には中国杭州の西湖から柳が移植された(図58)²⁾。柳の碑が残っており、松浦熙の自筆の文章が刻まれている。この柳は木勝詣人拝願記にも記されており、大変貴重な柳であったとされる。嘉永2年(1849)には雄香寺から菩提樹も移植されていた(図59)²⁾。

龍瑞寺と風香寺の間にある蓮池口から水岳へ通じる道は、荒川左衛門忠勝によって中坂と称された。中坂は雨天時に地面の状態が悪くなるということで、地面に小石を敷き詰めたとの記録があり(図60)²⁾、現在もその様子が見られる(図61)。中坂沿いには18本の松が植栽され、壇林松と呼ばれた。圓融山龍瑞寺永統御趣法帳には、東照神君すなわち徳川家康の旧姓である松平の松は十八公と表すことができると、伝説無量寿経の第十八願が重んじられていることにつ

いて、松平の血筋と浄土の教えには縁があると述べている²⁾。また、浄土宗の僧侶養成のために定められた浄土十八壇林が開創されたことにも由来して松が植栽された(図62)²⁾。このため、仏縁を結べるよう願われた趣意も窺うことができる。

風香寺の表にある街道沿いの土手には三十三所観音を表して、33本の桜が植栽された²⁾。この桜は梅ヶ谷津借楽園から移植されたもので、観音桜と刻まれた石碑(図63)が脇に据えられている。遠観楼八景に出てくる春花とは観音桜の事であるとも記述があった(図64)²⁾。樹木はいずれも現存していないが、今回の調査で龍瑞寺に珍しい樹木の植栽もあったことが明らかとなった。浄土により良く往生できるように樹木の植栽に関しても趣意趣向が込められていたと考えられる。以上の様に龍瑞寺の造成について、年代が明らかなるものを表4にまとめた。

表4. 松浦熙と龍瑞寺の造営について

文化3年(1806)	・松浦家第30代当主松浦熙による自身の墓所選定が開始。
文化11年(1814)	・強風で天叟によって植栽された大杉が倒木。
文政元年(1818)	・大杉を用いた景肅堂の再建が始まり、圓融山龍瑞寺を再興。
文政4年(1821)	・2月, 大和守である皓と共に墓所を神曾根山に選定。 ・4月, 神曾根山に1万180本の松を植樹。
文政6年(1823)	・恵照院にて常念仏を知り, 常念堂の造営を考案。
文政10年(1827)	・文明館裏手に築山を造成, 同所に宝蔵を造営。
天保2年(1831)	・7月5日, 熙が江戸の鳥越邸奥の間にて薬師如来の幻影を目撃。
天保3年(1832)	・熙の墓所が龍瑞寺に変更。 ・11月, 考案していた常念堂の略図を作成。 ・熙は法号を龍瑞院乾々観中居士として, 位牌を作成。
天保10年(1839)	・当時の住職, 宗葛が圓融山龍瑞寺並記を作成。 ・荒川丈左衛門忠勝による圓融山龍瑞寺永統御趣法帳の執筆開始。
天保11年(1840)	・平戸城奥の間に幾世のための個室, 無量軒を造成。
天保12年(1841)	・9月4日, 熙と幾世が剃髪し, 隠居。 ・10月21日, 無量軒の仏壇に熙自作の阿弥陀如来像を安置。 ・十牛庵建立。
天保13年(1842)	・親鸞の霊像をもらい受け, 常念堂の本尊として安置。
天保14年(1843)	・寿搭建立の趣意を公表。 ・寿搭の管理が雄香寺に委任。 ・寿搭場に108本の杉を植栽。 ・拙岳和尚の隠宅, 常念堂, 無量庵を取り立て。 ・堂宇管理および勤行人として拙岳和尚を任命。
弘化元年(1844)	・3月2日, 熙の寿搭を建立, 翌月には秦姫の水向搭を建立。 ・3月31日, 辰之井が湧出。 ・拙岳和尚の隠宅の総称を風香軒, この2階を遠観楼, 本堂を無量庵, 常念堂を報謝堂と命名。 ・幾世の隠宅を増設し, 一階を阿里廼屋, 二階を露光亭と称し, 総称を桔梗屋と命名。 ・幾世が浄土三部経を一字一石で写経し供養。 ・秀姫が日野家と離縁し平戸へ転移。 ・阿弥陀寺から龍瑞寺に木槿樹を移植。
弘化2年(1845)	・鎮守と満願水の間の高台に小亭を造営。 ・究竟堂に安置された聖観音菩薩を制作。
弘化3年(1846)	・小亭を醒眠亭と命名。
弘化4年(1847)	・醒眠八景を澤渡精齋廣繁が選定。 ・中国の杭州西湖から龍瑞寺に柳を移植。 ・8月14日, 慈眼寺住職による究竟堂への入仏供養, 中央本尊を薬師如来, 前立仏として聖観音菩薩を安置。
弘化4年(1847)	・醒眠八景を澤渡精齋廣繁が選定。 ・中国の杭州西湖から龍瑞寺に柳を移植。 ・8月14日, 慈眼寺住職による究竟堂への入仏供養, 中央本尊を薬師如来, 前立仏として聖観音菩薩を安置。
嘉永2年(1849)	・雄香寺から龍瑞寺に菩提樹を移植。
嘉永3年(1850)	・扇塚, 鼓塚を建立。
嘉永4年(1851)	・無量庵を中心とする計4棟の総寺号を風香寺と改称。
嘉永5年(1852)	・常磐蔵を造営。
嘉永6年(1853)	・4月, 醒眠亭が観月楼跡に移築, 還月舎と改称。
嘉永7年(1854)	・10月, 醒眠亭跡地に醒眠八景之碑を建立。
文久2年(1862)	・側用人の井手藤右衛門利恭により圓融山龍瑞寺後圖が描画。
安政4年(1857)	・熙の命により, 荒川丈左衛門忠勝が木勝詣人拝順記を作成。
昭和53年(1978)	・本堂(文明館)の老朽化に伴い, 鉄筋コンクリートで改築, 本尊に旧普門寺の本尊と龍瑞寺の本尊の二体を安置。

6. 木勝参詣について

木勝詣人拝順記は, 安政4年(1857)に荒川丈左衛門忠勝が松浦熙の命を受けて作成したものである³⁾。本書は龍瑞寺に参詣する民衆などの為に参詣を推奨する項目が挙げられている。項目としては龍瑞寺境内の

御堂をはじめ, 自らの墓所や設けられた石碑, 井戸等が挙げられ, 龍瑞寺に隣接する風香寺境内の各堂宇や墓所, 龍瑞寺の背後にそびえる水岳, 龍瑞寺の向かいの山にある松浦義の墓所や近辺の社寺等さまざまな記述があった(表5)⁷⁾。その他, 周辺地域で産出される水晶や瑪瑙の記述もあることから龍瑞寺一帯の案内書としての役割もあったと考えられる。現地調査では

表5. 木勝詣人拝順記の詳細

龍瑞寺	・ 普門寺の末寺で臨済宗盤珪和尚法派の寺 ・ 肥前守であった松浦義が隠居後に移住した寺を木勝山妙幢寺と称した ・ 一時廃寺となるが再興され、圓融山龍瑞寺と称した
景肅堂	・ 義が植栽した杉を用いて建立した御堂 地蔵尊 天叟自作 天叟御木像 足利義教に御出仕した時の赤烏帽子の尊容を模して彫刻した像 天叟御霊牌 天叟自作 乾齋御寿像 熙自作 乾齋御寿牌 熙自作 宝塔 上の段に増上寺大僧正定月が所持していた仏舍利を二つ安置 下の段に江州浅井郡木の元宿長亀山晴仙寺の地蔵尊であった木の元の地蔵尊を一体安置 地蔵尊像 天叟が植栽した杉の枝を横切りにした小口でできた衝立 乾齋御画像 熙が神龍の鎧を身に着けている肖像画 霊杖御額 豊功の筆 放光御額 増上寺大僧正定月の筆 景肅御額 白川の城主松平越中守定信、すなわち定信楽翁の筆 御半鐘 天叟の時代のもの 熙の記文がある鯨鐘が別にあり、龍瑞寺再興後に寄進 御石灯笼 景肅堂前の灯笼は曜が奉獻した常夜燈
文明館	・ 龍瑞寺の本坊、後に茶屋として利用 ・ 文明年中は天叟が居住 ・ 文明館の廊下口にある額は熙の筆
御居間	・ 楊柳観音の画像を床垣の後ろの棚に安置 乾々齋御額 水戸中納言斎修の筆 観中御額 摂州平野融通大念仏寺の座主数弥上人の筆
大杉御碑	・ 義手植えの杉があったが、三百余年を経て文化11年甲戌の大風の時に倒木
十牛庵	・ 離れて建てられた方丈庫裡であり、当寺の僧侶が居住 釈迦牟尼佛 盤珪和尚作 七観音 熙の命にて、松林院作の聖観音尊像を白石谷慶が模刻し、六観音の尊像を添えたもの
御霊泉口	石像 当寺の規格を立てた親子の像 常磐蔵 龍瑞寺の宝蔵 額は世子詮の筆 守護は観音菩薩で、久昌夫人御霊牌、霊仙君御霊牌を安置 満願水 安満岳で祈願して清泉が湧き出したため満願水と称され、その前の池を満願泉と呼称
水神	八大龍王霊水尊神の石碑に熙の筆による記銘
辰之井	・ 弘化元年(1844)甲辰3月31日の辰の日に湧出したため命名 ・ 頂上の石に熙の記文 不動尊 江戸目黒不動尊を模した像を洞内に安置
九如水	・ 義の時からある井戸、三方に井筒があり、記文は熙の筆
九如燈	・ 四方屋作りをした笠の灯笼 ・ 笠石用鉄蓋は掎州伊丹津国屋隠居の坂上三有郎が献上
柳	・ 唐土杭州西湖の柳を移植
醒眠八景之碑	・ 醒眠亭という家屋からの眺めを八景として石碑に明記
鎮守	・ 妙見官と正一位稻荷官
告戒之御碑	・ 曜の記文
御茶園口	石像 熙公の思いを受け継いで諸事に網を広げる翁の像
御蓮池口	石像 築山などを天然に模して造る人の像 分陀利池 梵語で白蓮を分陀利という。白蓮は今は無く、御蓮池口や分陀利池という名が名残
御寿塔場	・ 多くの杉を植えて、千代の杉村と呼称。龍瑞寺の境内であるが雄香寺との共有地 乾齋御寿塔、真浄夫人御水向塔 墓の本所はいずれも天祥寺 御扇塚、御鼓塚、三部経塔 宝塔 上には那智山如意輪大士尊像を模した銅像が安置。下には三十三ヶ所の霊場の土を奉納
壇林松	・ 浄土十八壇林を表して植えられた松が18本

観音桜	・ 観音三十三所を表して植えられた桜が 33 本	
大悲水	・ 以前は道上に観音があったため、この井戸を大悲水と呼称	
十句観音経御碑	・ 諸人結縁のため熙の筆でしたためられた石碑	
風香寺	・ 分陀利池の蓮の香りが匂うため、風香寺と呼称 ・ 真宗平戸光明寺の末寺で、平戸八十八ヶ所の二十四番	
無量庵	・ 風香寺の本堂 阿弥陀如来 本尊は熙公作 無量寿額 増上寺大僧正典海の筆 風香蘭若額 杭州沈那憲の筆で、清朝製	
報謝堂	・ 仏恩報謝のために熙が建立した御堂 阿弥陀如来 本尊は親鸞聖人作 乾齋公御画像 画像の幅中には自詠 乾齋御寿牌 報謝堂御額 熙の筆 松浦瀉御額 本願寺門跡光沢聖人の筆	
桔梗屋	・ 2 階建ての家屋を桔梗屋と呼称 ・ 1 階の座敷を阿里廼屋と呼び、熙公の筆による額を安置 ・ 2 階の座敷は露光亭と呼び、居間として利用 ・ 松ヶ丘への道の脇に桔梗花壇を造成	
遠観楼	・ 遠観楼八景が選定され、額に記載 ・ 現在は樹木が繁茂	
松ヶ岡	御寿搭	秀姫の寿搭、風香寺の境内、平戸誓願寺と掛け持ちの土地
集曾搭	・ 幾世の宿許である高橋氏の家が新葬の時に茶毘して遺骨を納める搭	
古墳木魂地藏	・ 誰の墓か不明。龍瑞寺山の木魂として崇拝	
水岳	古墳 地藏尊	山城殿と称し、山城の人の墓であるとされる 熙が水岳大菩薩を安置、平戸八十八ヶ所の二十二番
おぢ之尾山	天叟御墓 覚翁御塔 古墳	天叟は平戸普門寺の開山をしたため、搭銘に普門開山と明記 熙が建立 誰の墓か不明 天叟に縁のある人と思われる四つの古墳
究竟堂	・ 真言宗の慈眼寺が請持ちの御堂 ・ 平戸八十八ヶ所の二十六番 正面之御宝殿 熙によって薬師如来が安置 右之御宝殿 日光裏見瀧にある荒浄不動尊の掛物を安置する予定の宝殿 左之御宝殿 守枕を安置する予定の宝殿 聖観音菩薩 熙の書の反古を用いて作られた尊像 究竟殿御額 熙の筆、究竟殿と呼ばれた内陳の額 御石灯籠 熙が献備	
地之神	・ 大悲水の上手にあったもので、紐指社人三輪家の請け持ち	
慈眼寺	・ 昔は赤松の慈眼岳を寺地としていたが、龍瑞寺東手の道下に移り、その後龍瑞寺境内に移築 ・ 平戸八十八ヶ所の二十五番 地藏尊 本尊は弘法大師作 観音菩薩 大悲水の上手にあったものを御堂に安置	
家之浦	姫宮 五輪搭	祭神は稲田姫、別当は迎紐指福満寺、祠官は紐指社人三輪家 景肅堂の脇から発見
沖之宮	・ 木勝浦口にある三社相殿、正面には若宮大明神、祭神は大巳貴命 ・ 向かって右は大三輪大明神、祭神は大巳貴命、祠官は三輪家、備後の先祖が大和の三輪社を自身で遷し勧請した神 ・ 向かって左は春日大明神、祭神は天児屋根命、別当は福満寺、祠官は三輪家	
周辺地域	・ 木勝から一里離れた紐指村の草積では水晶石が産出 ・ 木勝から三里離れた古田村の衣ヶ浦では瑪瑙石が産出	

木勝詣人拝順記を基に道を辿り、当時の参詣順路（図65）を推察し、参詣項目の現況を圓融山龍瑞寺後圖と照らし合わせてまとめた（図2, 66, 67, 68, 69）。

圓融山龍瑞寺永統御趣法帳には殿様用と御隠居様用の参詣の順路（図70）や行事の手順が明記されていた¹⁾。景肅堂に関しては、堂内に安置された地藏尊や寿像等にも参詣順が決められていた（図71）²⁾。この順路で参詣を行うことで雑念を取り去り、煩惱から解放されるという。参詣の順路を定めて行事とすること

で、松浦熙だけでなく後世にも龍瑞寺の参詣を推奨し、祭祀が途絶えないようにする試みであったと考えられる。殿様用と御隠居様用の参詣順路を拝順記と同様に図72, 73に記した。

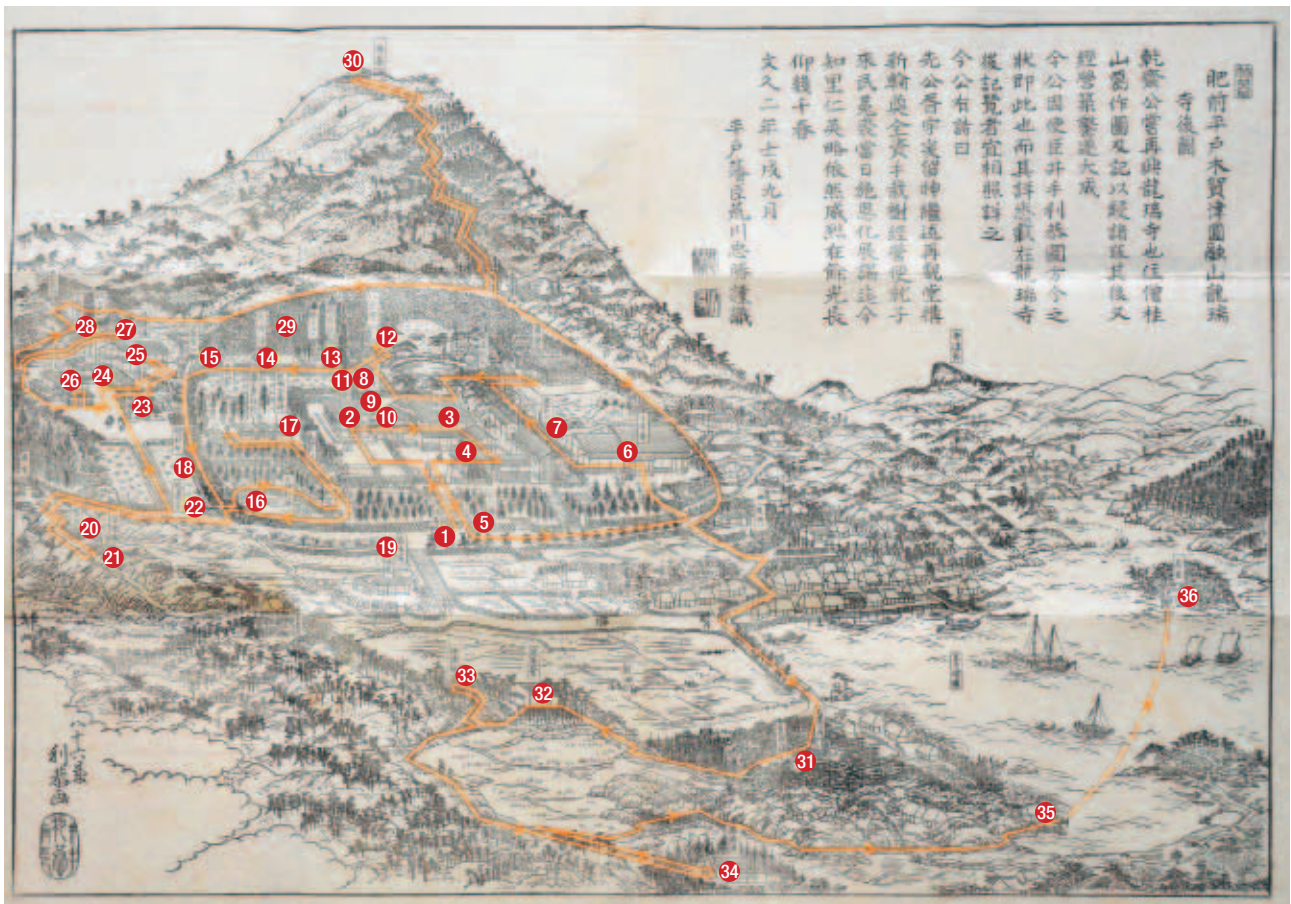


図65. 木勝詣人拝順記に基づく参詣コース 圓融山龍瑞寺後圖 (41×56cm)

- | | | | | |
|----------|---------|------|---------|-------|
| ①龍瑞寺 | ②景肅堂 | ③文明館 | ④御居間 | ⑤大杉御碑 |
| ⑥十牛庵 | ⑦御靈泉口 | ⑧辰之井 | ⑨九如水 | ⑩九如燈 |
| ⑪柳 | ⑫醒眠八景之碑 | ⑬鎮守 | ⑭告戒之御碑 | ⑮御茶園口 |
| ⑯御蓮池口 | ⑰御寿塔場 | ⑱壇林松 | ⑲観音桜 | ⑳大悲水 |
| ㉑十句観音経御碑 | ㉒風香寺 | ㉓無量庵 | ㉔報謝堂 | ㉕桔梗屋 |
| ㉖遠観楼 | ㉗松ヶ岡 | ㉘集曾塔 | ㉙古墳木魂地藏 | ㉚水岳 |
| ㉛おぢ之尾山 | ㉜究竟堂 | ㉝地之神 | ㉞慈眼寺 | ㉟家之浦 |
| ㊱沖之宮 | | | | |



⑫ 醒眠背景之碑
(61 × 158cm)



⑦ 御霊泉口 (満願水)
(190 × 150cm)



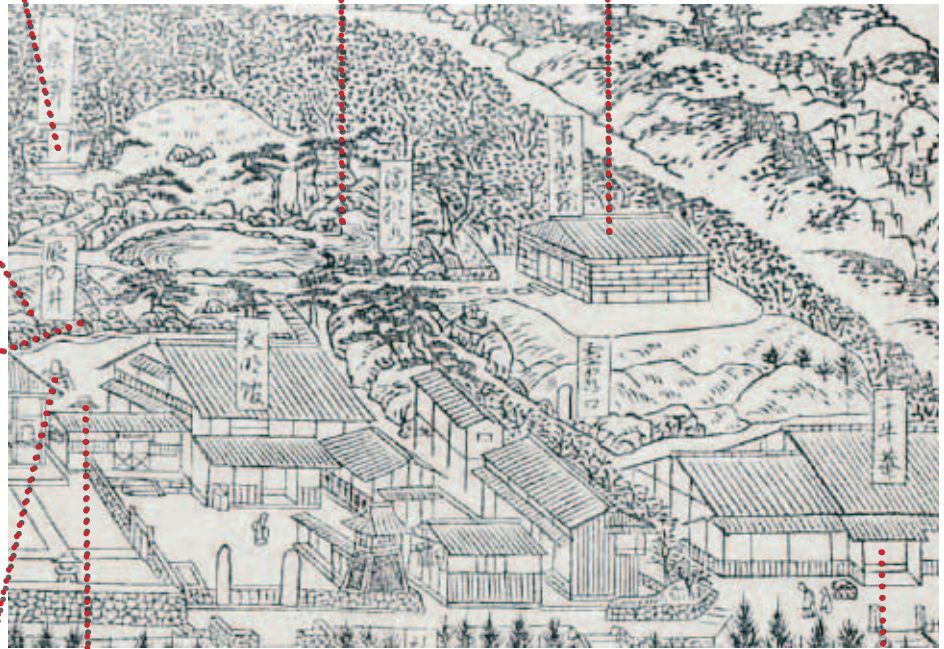
⑦ 御霊泉口 (常磐蔵)
(外壁 590 × 1000cm)



⑪ 柳
(25 × 100cm)



⑧ 辰之井 (155 × 130cm)



圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)



⑨ 九如水 (75 × 90cm)



⑩ 九如燈 (75 × 130cm)



⑥ 牛庵 (跡地)

図 66. 参詣項目の現況



⑮御茶園口
36 × 85cm



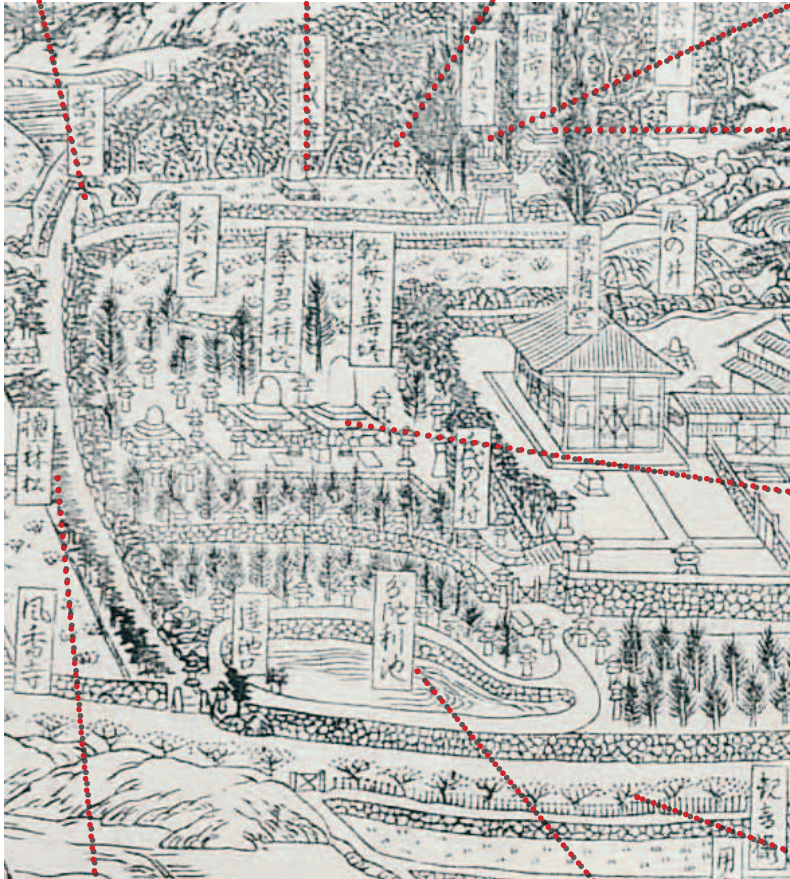
⑭告戒之御碑
(60 × 105cm)



⑲古墳木魂地藏
(388 × 140cm)



⑬鎮守 (妙見官)
(76 × 96cm)



圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)



⑬鎮守 (正一位稻荷官) (64 × 76cm)



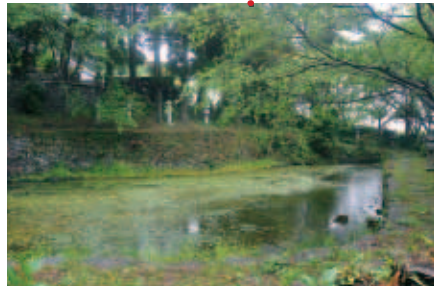
⑰御寿搭場



⑱観音桜 (跡地)



⑱壇林松 (跡地)



⑯御蓮池口 (分陀利池)

図 67. 参詣項目の現況



㊸集會塔 (77 × 84cm)



㊸松ヶ岡 (秀姫の寿塔は寿塔場に移動) (66 × 124cm)



圓融山龍瑞寺後圖
(41 × 56cm)



㊸桔梗屋



㊸無量庵 (跡地) ㊸報謝堂 (跡地)



㊸遠觀楼 (跡地)



㊸大悲水 (325 × 320cm)



㊸十句観音経御碑
81 × 35cm

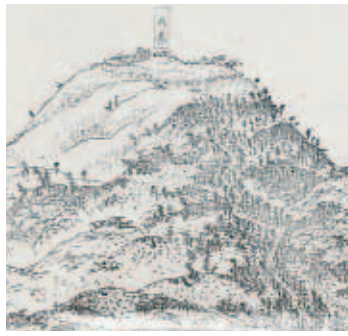


㊸風香寺

図 68. 参詣項目の現況



⑩水岳



圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)



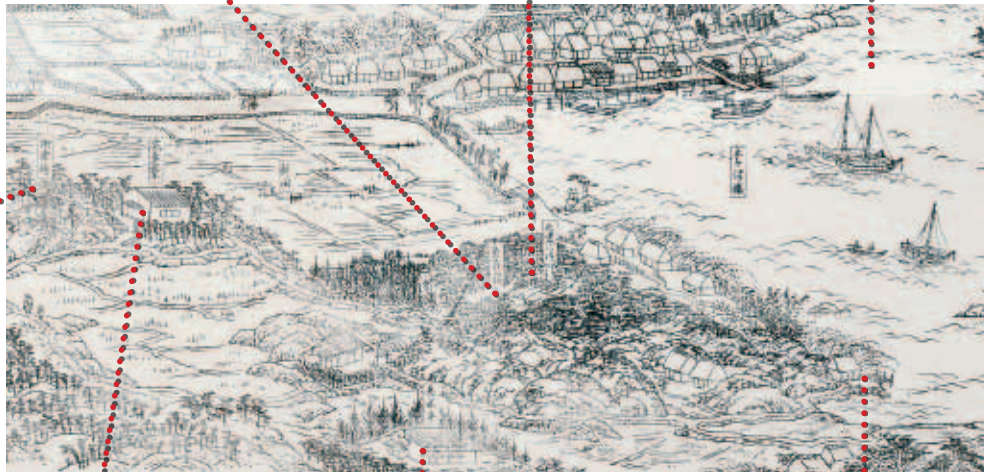
⑪おち之尾山 (覚翁公墓所)
(77 × 135cm)



⑫おち之尾山 (天叟公墓所)
(72 × 142cm)



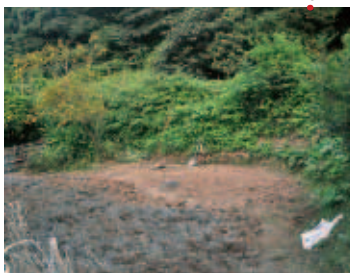
⑬沖之宮



圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)



⑭地之神 (30 × 21cm)
(現況不明)



⑮究竟堂 (跡地)



⑯慈眼寺 (現況不明)
圓融山龍瑞寺永統御趣法帳 (19 × 27cm)



⑰家之浦

図 69. 参詣項目の現況

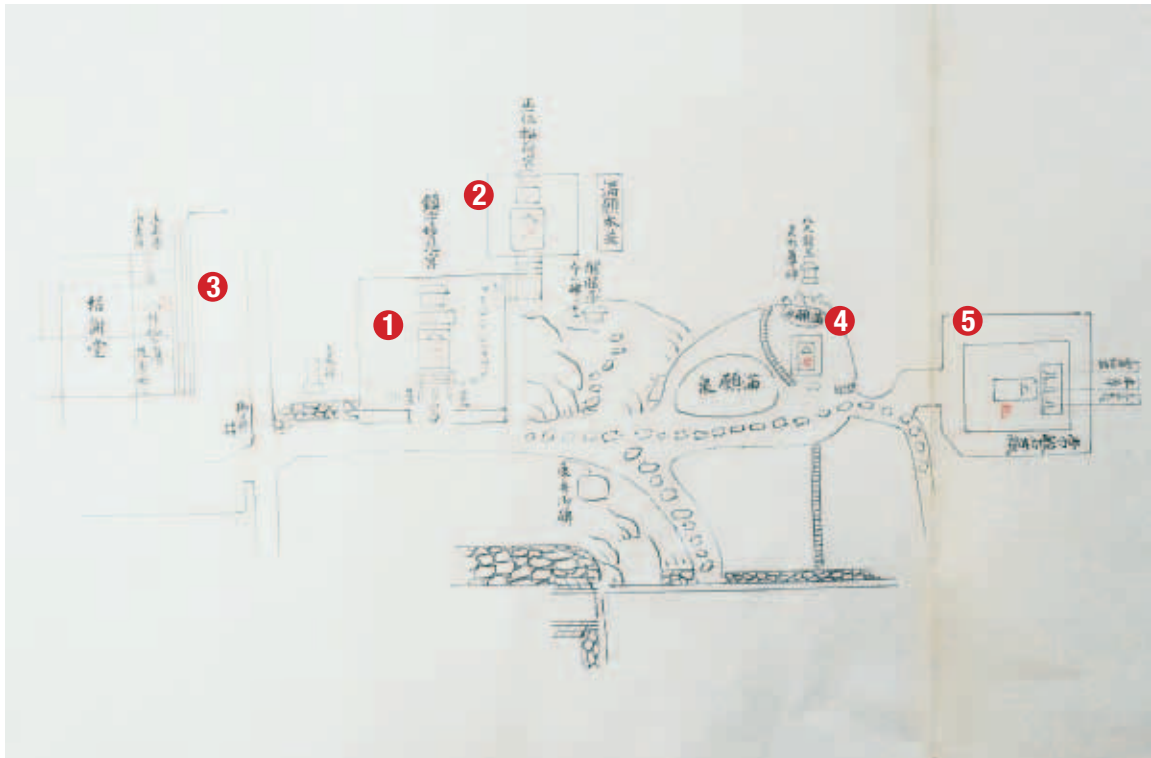


図70. 殿様用の参詣順序を記した図
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

- ①妙見官 ②正一位稻荷官 ③報謝堂 ④満願水 ⑤常磐藏

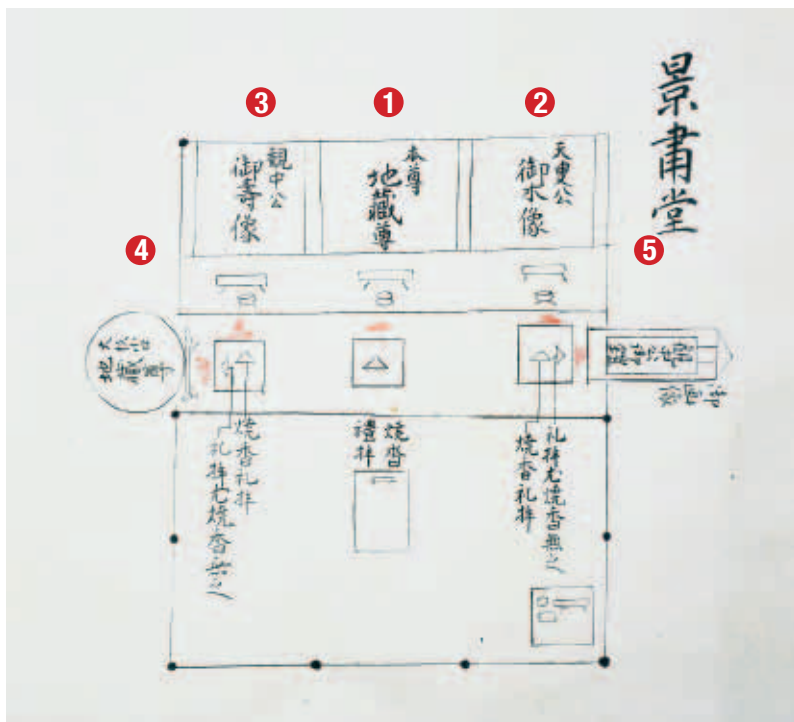


図71. 景肅堂内の参詣順を記した図
圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19×27cm)

- ①本尊地藏尊 ②天叟公御木像 ③観中公御寿像 ④大杉小口地藏尊 ⑤観中公御鑑御寿像

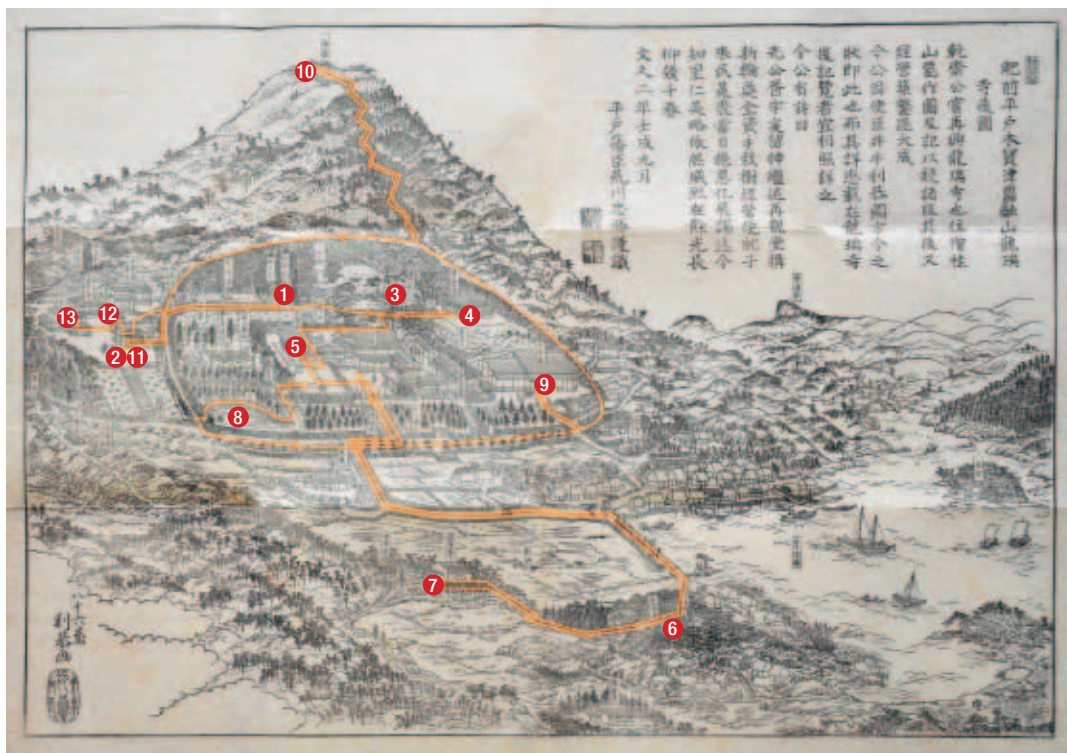


図72. 殿様用の参詣順路 圓融山龍瑞寺後圖 (41×56cm)

- ①鎮守：1.妙見官 2.正一位稻荷官 ②報謝堂：1.御寿像 2.御寿牌 ③満願水：八大龍王 ④常磐蔵：1.久昌院様寿牌 2.靈仙院様寿牌
 ⑤景肅堂：1.地藏尊 2.天叟公御木像 3.観中公御寿像 4.大杉小口地藏尊 5.観中公御鎧御寿像 ⑥おちの尾山：1.天叟公墓所 2.覚翁公墓所
 ⑦究竟堂 饅頭蒔き ⑧分陀利池 (都合次第で巡見) ⑨十牛庵：諸佛 ⑩水岳：地藏尊 ⑪報謝堂：本尊阿弥陀佛
 ⑫無量庵：本尊阿弥陀佛 ⑬遠観楼 御精進解

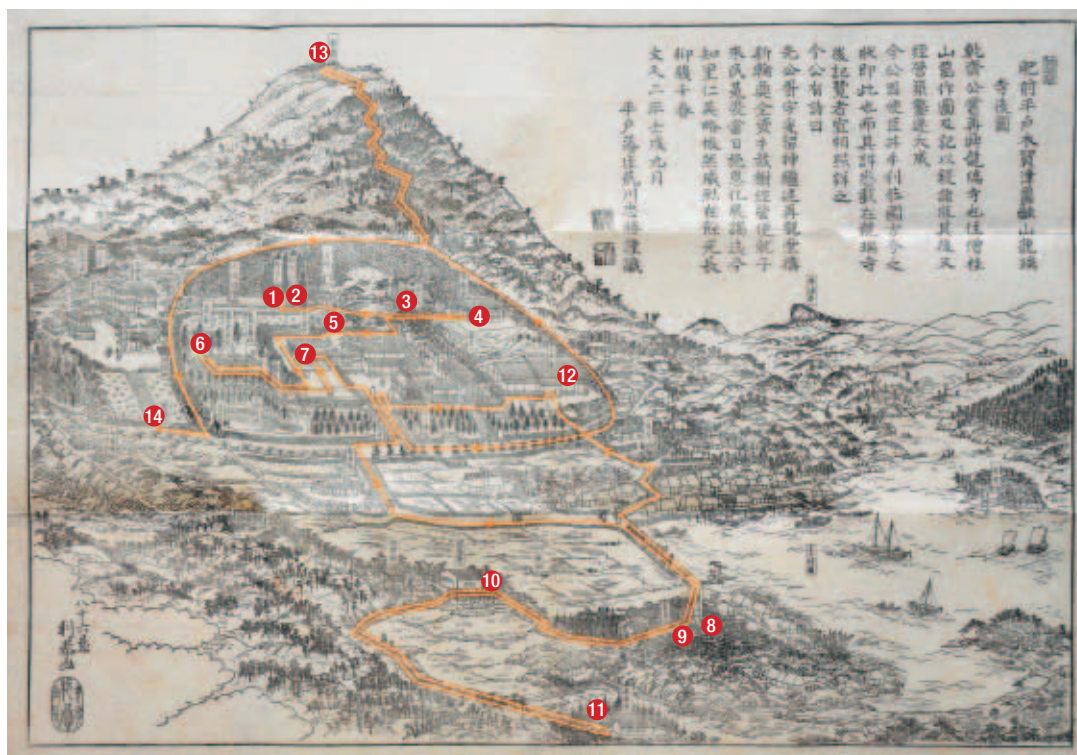


図73. 御隠居様用の参詣順路 圓融山龍瑞寺後圖 (41×56cm)

- ①妙見官 ②正一位稻荷官 ③満願水八大龍王 ④常磐蔵 ⑤辰之井 ⑥三部経搭 ⑦景肅堂 ⑧天叟公墓所 ⑨覚翁公墓所
 ⑩究竟堂 ⑪慈眼寺 ⑫十牛庵 饅頭蒔き ⑬水岳 ⑭風香寺

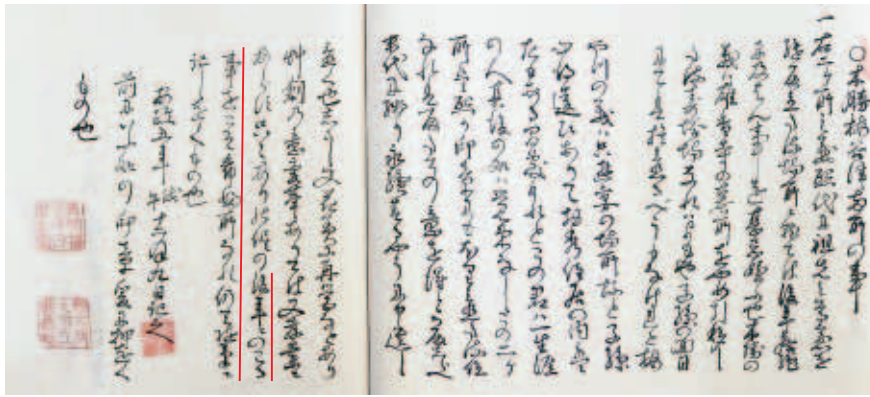


図74. 龍瑞寺と借楽園が変わることなく残ることを望んだ記述
亀岡随筆(18×29cm)

7. おわりに

圓融山龍瑞寺の伽藍配置は、松浦熙の墓所整備によって大きく変化した。松浦熙の菩提寺の整備に関しては、墓所選定で先祖に縁のある土地を選んでいることや、先祖の植えた杉を御堂として後世まで残そうと伽藍配置や火の使用禁止、防火用水の充実などさまざまな工夫が行われていたことから松浦熙が先祖から受け継いだ平戸の土地や風景を大切にし、自身の没後も守っていこうとする思いが窺える。さらに、木勝詣人拝順記によって龍瑞寺に参詣する民衆に対して各霊場等へ手引きしていたことから、民衆やその後世にも松浦家に縁のある土地を伝え、祭祀を途絶えさせないことで土地を守ろうとしたと考えられる。

亀岡随筆には龍瑞寺と借楽園は、第21代松浦義と第30代松浦棟に縁のある場所であるため、後世まで建てられた由緒を伝え、残してゆく事を強く望んだと記されていた(図74)³⁾。特に寿搭場は、松浦熙以外の者による改変は禁じていたという記述もあり³⁾、変わることのない霊場、神域を造ろうとしたことが考えられる。龍瑞寺の構造物や植栽の調査によって、寿搭や九如燈等から松浦熙の長寿が祈願されたこと、千代の枚村の杉や壇林松等から浄土に往生できるように趣向を凝らしたことが明らかとなった。景肅堂前の常夜燈は夜中に境内を照らすものであり、常夜は黄泉の国を表し、究竟堂の和歌が龍瑞寺を極楽と表現していることから、松浦熙が龍瑞寺に浄土の世界、黄泉の国を表現したものと考えられる。

以上の事から、圓融山龍瑞寺は松浦熙の菩提寺として長寿と浄土往生を祈願する黄泉の国として、末代まで先祖から引き継いだ領土と風景を守ることを目指したものと考えられる。

要約

平戸藩第10代藩主である松浦熙は、寛政3年(1791)に松浦静の三男として平戸城内で誕生した。在任中は財政難を打開するため、シジミ養殖や新田開発などの殖産振興の奨励に尽力した。また文化にも造詣が深く、茶の湯や香道を嗜み、「百菓之図」、「平戸領地方八奇勝図」の製作を行うなど多岐に渡る功績を残した。天保12年(1841)に50歳で引退してからは、慶応2年(1867)に76歳で亡くなるまで、歴代藩主の中で唯一平戸で生涯を過ごした人物であった。

本研究では、松浦熙が自らの菩提寺として整備した圓融山龍瑞寺(現:善山普門寺)について、松浦熙が製作した「木勝拝順記」や松浦家に伝わる史料の分析と現地調査によって伽藍配置や構造物などの子細を調査し、菩提寺整備の詳細を明らかにした。

参考文献

- 1) 助松浦史料博物館蔵(1862): 圓融山龍瑞寺後記, 全1巻
- 2) 助松浦史料博物館蔵(1867): 圓融山龍瑞寺永統御趣法帳, 全60巻
- 3) 助松浦史料博物館蔵(1833): 亀岡随筆, 全88巻
- 4) 助松浦史料博物館蔵(1839): 圓融山龍瑞寺並記
- 5) 助松浦史料博物館蔵(1862): 圓融山龍瑞寺後圖
- 6) 吉田収郎(1982): 普門寺と風香寺: 文芸堂, 175pp.
- 7) 助松浦史料博物館蔵(1857): 木勝詣人拝順記, 全1巻
- 8) 岡楓子・永松義博・杉本和宏・松尾麻衣子(2014): 平戸藩主松浦熙の木勝拝順記について: 日本造園学会九州支部平成26年度佐賀大会研究(事例報告集) Vol.22, 55-56.

本研究は、JSPS 科学研究費助成事業(基盤研究C) 課題番号15K07834の助成を受けて行った。

資料の出典ならびに所蔵

	タイトル	出典	所蔵
図 1	松浦家当主系図		
図 2	参詣項目の現況	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 3	天叟の350年忌日を機に景肅堂を再建した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 4	神曾根山に10,180本の松を植樹した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 5	寿塔		
図 6	龍瑞寺に墓所が決定し寿塔と水向塔が建立された記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 27cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 7	寿塔場が千代の杵村と呼ばれた記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 28cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 8	御石灯笼御立所之圖	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 29cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 9	寿塔に伊豫産の石を用いた記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 30cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 10	長寿の先祖に倣って寿塔の建立を決意した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 31cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 11	水向塔に秦姫の毛髪が納められた記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 32cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 12	寿塔と水向塔が比翼連理に例えられた記述	亀岡随筆 (18 × 29cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 13	扇塚、鼓塚の由来についての記述	亀岡随筆 (18 × 30cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 14	幾世が浄土三部経を一字一石で写経した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 32cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 15	西国三十三ヶ所霊場の土を納めて宝塔とした記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 33cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 16	秀姫の寿塔場を松ヶ岡と称した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 34cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 17	圓融山龍瑞寺並記	圓融山龍瑞寺並記 (36 × 47cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 18	圓融山龍瑞寺後圖	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 19	天保10年(1839)の測量図	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 32cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 20	文久元年(1861)の測量図	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 33cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 21	石像		
図 22	天叟の木像		
図 23	熙の寿像		
図 24	熙が神龍の鎧を着用した肖像画		
図 25	熙が神龍の鎧を着用した肖像画が景肅堂に安置された記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 33cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 26	大杉小口の衝立		
図 27	天叟手栽杉樹北面圖及び南面圖		
図 28	景肅堂内での火の使用を禁止した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 33cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 29	玉燈が寄付された記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 34cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 30	文明年間に松浦義が文明館に居住した記述	亀岡随筆 (18 × 29cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 31	十牛庵の由来と本坊が引き移された記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 34cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 32	十牛庵が景肅堂の東に建立された理由について	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 35cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 33	十牛庵の間取り図	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 36cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 34	常磐蔵記		
図 35	醒眠亭の造営と醒眠八景の選定についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 36cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 36	醒眠亭を移設した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 37cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 37	常念仏の感得と常念堂建立についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 38cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 38	阿里廼屋の由来についての記述	亀岡随筆 (18 × 28cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 39	露光亭の由来についての記述	亀岡随筆 (18 × 29cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 40	和歌が詠まれた扇型の額	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 38cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 41	遠観楼八景		
図 42	究竟堂の図	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 38cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 43	熙が江戸屋敷で見た薬師如来を模刻し究竟堂の本尊とした記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 39cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 44	究竟堂の左右の宝殿についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 40cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 45	前立仏に反古を用いた記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 41cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 46	究竟堂の和歌の記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 42cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 47	分陀利池		
図 48	分陀利池の由来についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 42cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 49	満願水湧出の由来についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 43cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 50	八大龍王靈泉尊神		

	タイトル	出典	所蔵
図 51	辰之井の由来についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 43cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 52	九如燈の笠「天保九如」の文字		
図 53	九如水が天保九如の文字に由来する記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 43cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 54	寿搭場に杉を 108 本植栽した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 44cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 55	千代の杵村の石碑		
図 56	風香寺に桔梗を植栽した記述	亀岡随筆 (18 × 29cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 57	阿弥陀寺から木槲樹が移植され、枯死した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 44cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 58	中国杭州の西湖から柳を移植した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 45cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 58	中国杭州の西湖から柳を移植した記述	木勝詣人拝順記 (20.5 × 13cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 59	雄香寺から菩提樹を移植した記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 46cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 60	中坂が整備された記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 47cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 61	小石が敷き詰められた中坂	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 48cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 62	壇林松の由来についての記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 49cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 63	観音桜の碑		
図 64	観音桜の由来と遠観楼八景の一つであった記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 49cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 65	木勝詣人拝順記に基づく参詣コース	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 56cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 66	参詣項目の現況	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 57cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 67	参詣項目の現況	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 58cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 68	参詣項目の現況	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 59cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 69	参詣項目の現況	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 60cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 70	殿様用の参詣順路を記した図	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 49cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 71	景肅堂内の参詣順を記した図	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 50cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 72	殿様用の参詣順路	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 60cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 73	御隠居様用の参詣順路	圓融山龍瑞寺後圖 (41 × 61cm)	(財) 松浦史料博物館蔵
図 74	龍瑞寺と偕楽園が変わることなく残ることを望んだ記述	圓融山龍瑞寺御趣法帳 (19 × 50cm)	(財) 松浦史料博物館蔵